

第4部 子供の生活・友人関係

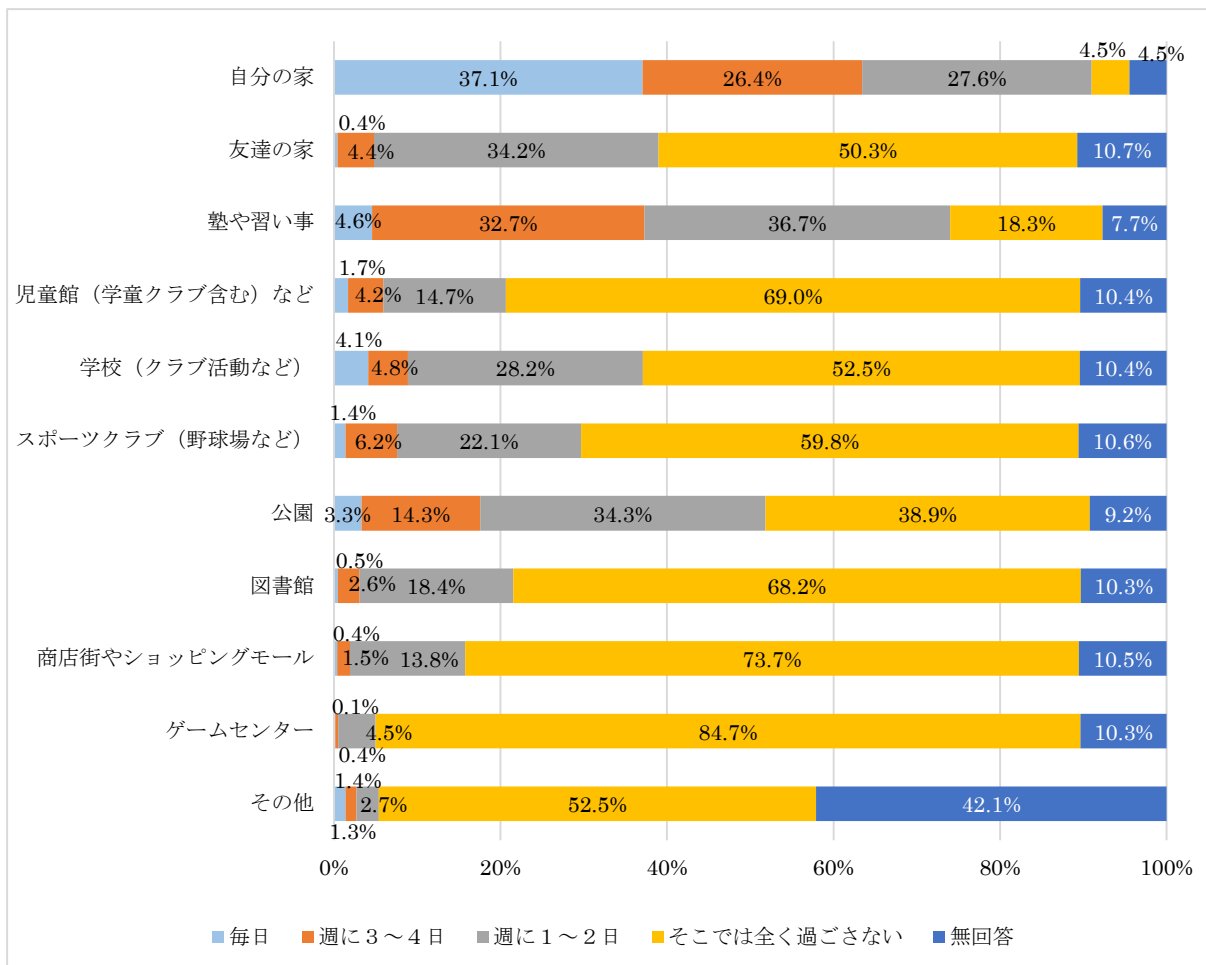
1 放課後・休日の過ごし方

(1) 平日の放課後の過ごし方

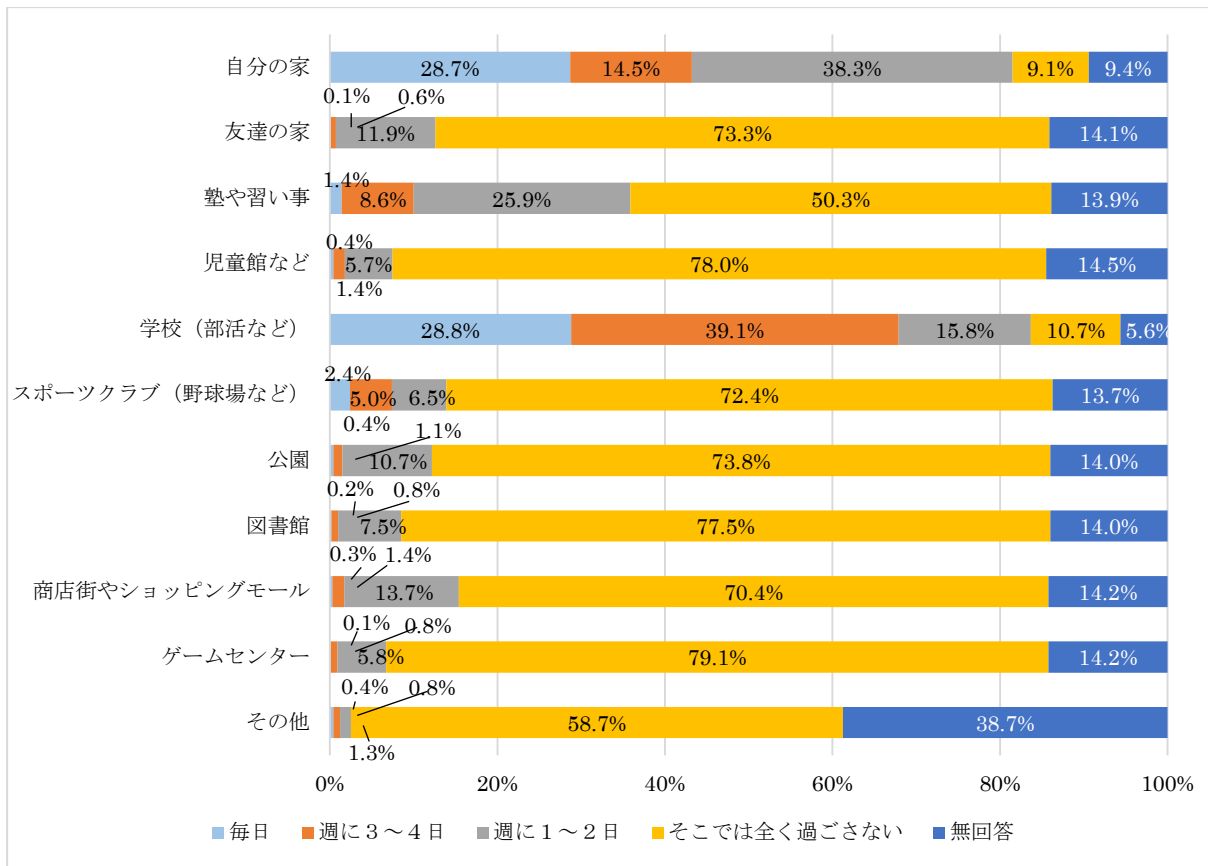
平日の放課後の過ごし方について、「平日（学校に行く日）の放課後（夕方6時くらいまで）」（16-17歳は「平日の自由時間（学校の放課後や仕事がない時）」）をどこで過ごすかを子供に聞いた。平日の放課後に「週に3～4日」以上過ごす場所について、小学5年生では、「自分の家」が最も高く約6割、次いで「塾や習い事」が約4割、「公園」が約2割である。中学2年生では、「学校（部活など）」が最も高く約7割、次いで「自分の家」が約4割、「塾や習い事」が1割である。16-17歳の子供では、「自分の家」が最も高く約8割、次いで「学校」が約4割である。

「図書館」については、小学5年生の21.5%、中学2年生の8.5%、16-17歳の12.5%が週に1日以上過ごしており、子供の居場所として一定の機能がある。

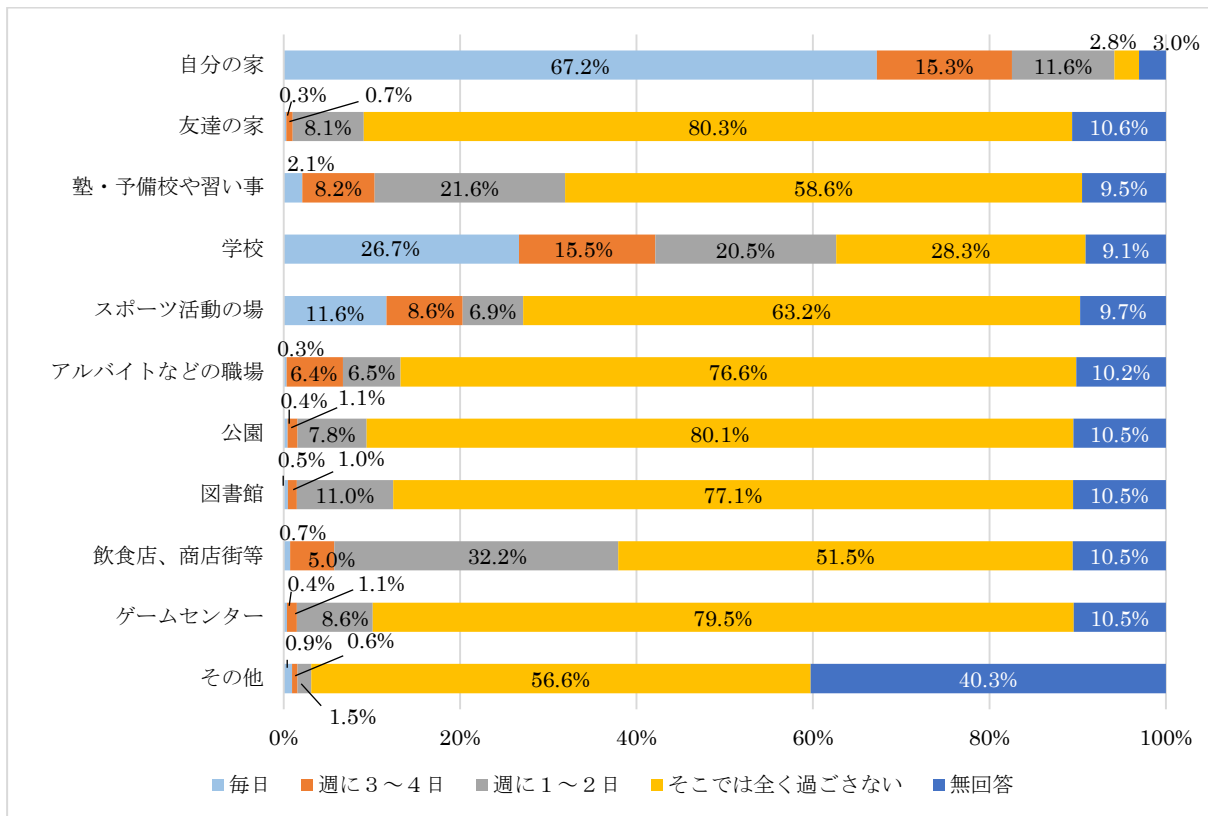
図表 4-1-1 平日の放課後に過ごす場所(小学5年生)



図表 4-1-2 平日の放課後に過ごす場所(中学 2 年生)



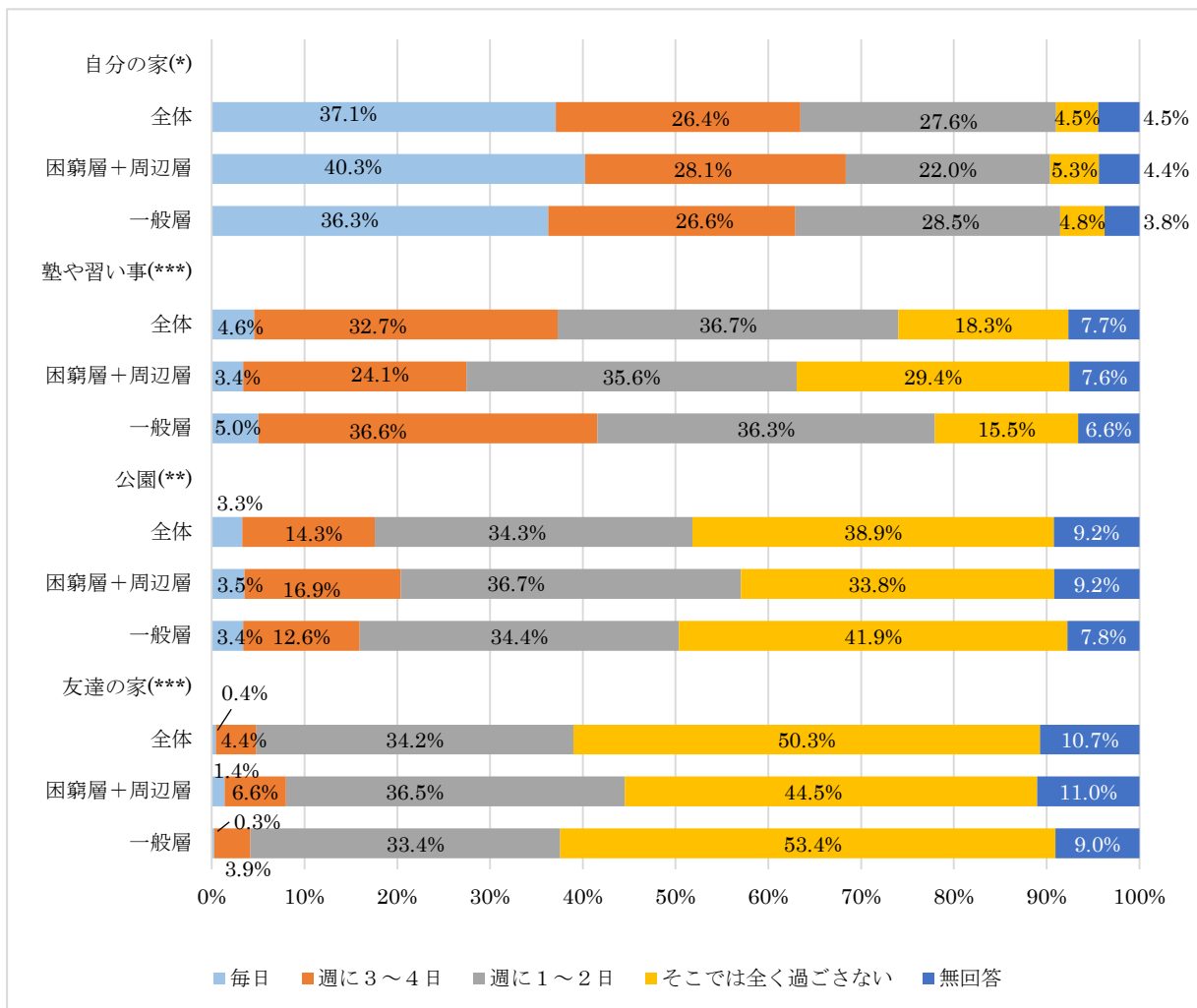
図表 4-1-3 平日の自由時間(学校の放課後や仕事がない時)に過ごす場所(16-17歳)



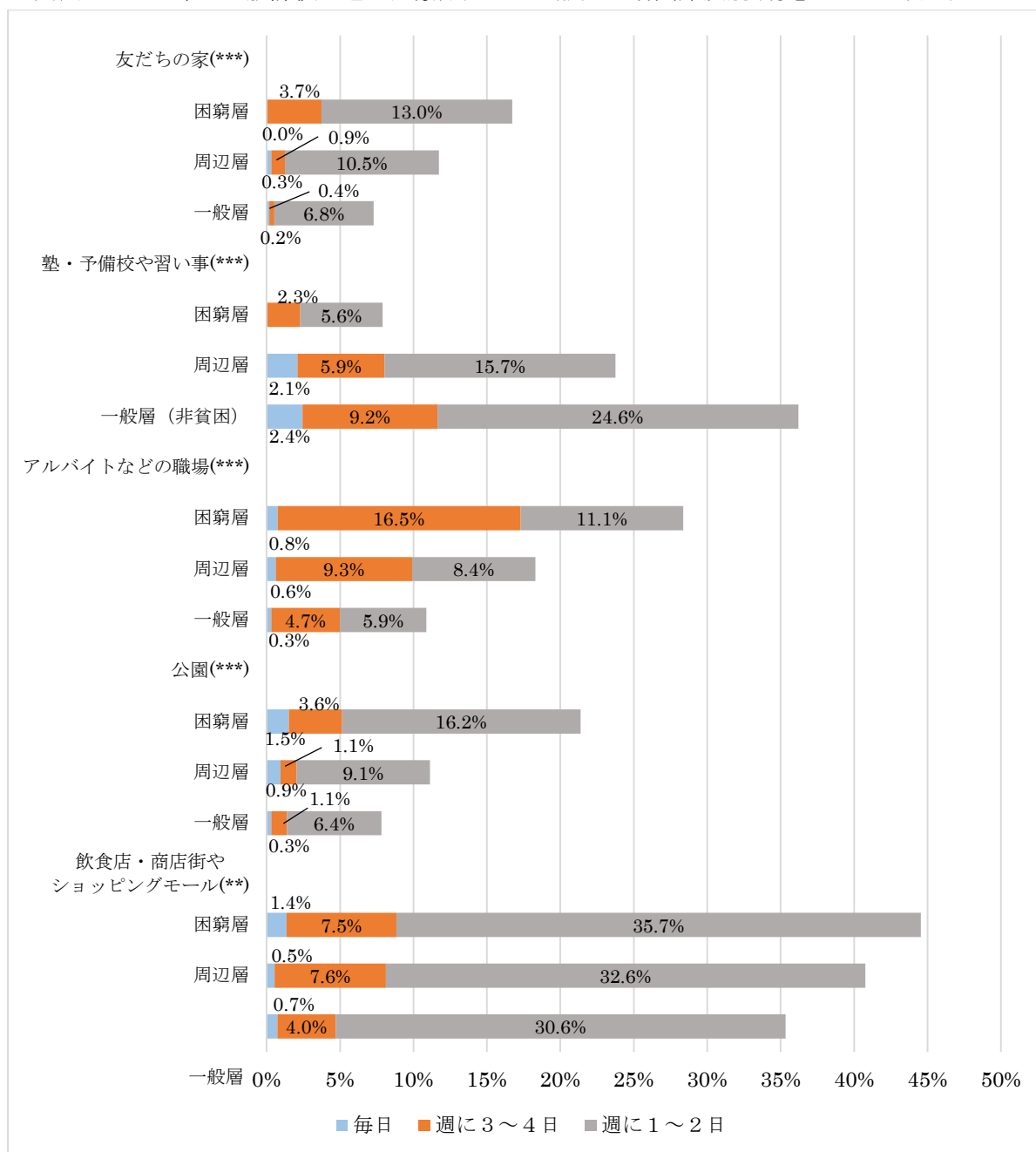
生活困難度別に見ると、困窮層、周辺層の小学5年生は一般層に比べて「自分の家」で毎日過ごす割合が高い。また、困窮層、周辺層の子供は「公園」、「友達の家」、「児童館（学童クラブ含む）」で過ごす割合が一般層よりも高い一方、「塾や習い事」で過ごす割合が低かった。また、困窮層の小学5年生は週に1日以上、「商店街やショッピングモール」（22.7%）、「ゲームセンター」（12.0%）で過ごす割合が他の層より高い。

中学2年生、16-17歳の子供もほぼ同様の傾向にあるが、16-17歳になると、アルバイトなどの職場で過ごす頻度が困窮層ほど高くなる。

図表 4-1-4 平日の放課後に過ごす場所(小学5年生):生活困難度別(有意差のある主な項目)



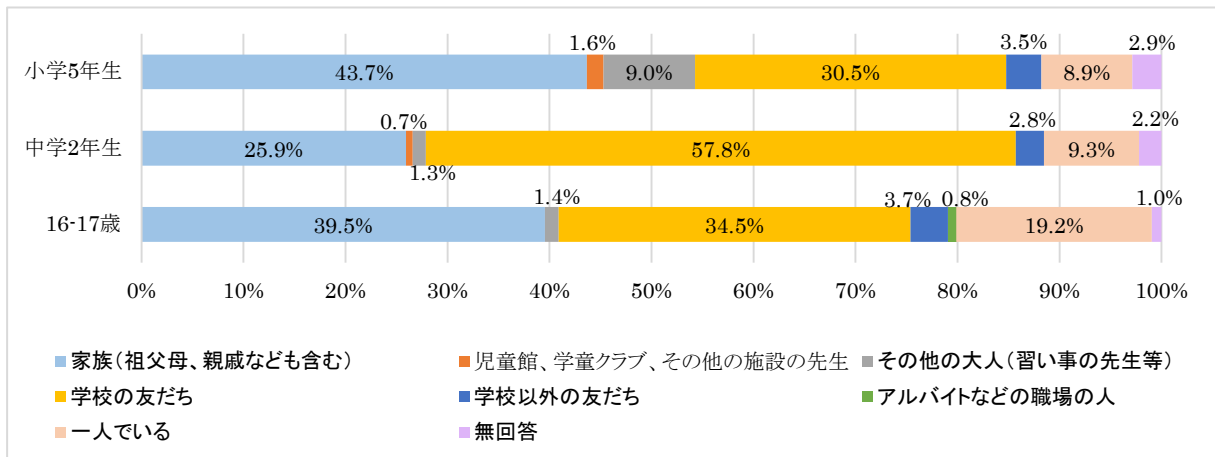
図表 4-1-5 平日の放課後に過ごす場所(16-17 歳):生活困難度別(有意差のある項目)



「平日（学校に行く日）の放課後（夕方6時くらいまで）」（16-17歳は「平日の自由時間（学校の放課後や仕事がない時）」）を一緒に過ごすことが最も多い人はだれかを聞いた。小学5年生は「家族」と過ごす割合が最も高く43.7%、次いで「学校の友だち」が30.5%である。また、中学2年生になると、「学校の友だち」と過ごす割合が最も高く57.8%、次いで「家族」が25.9%となり、16-17歳になると、再び「家族」と過ごす割合が最も高くなり39.5%、次いで「学校の友だち」34.5%となる。

平日の放課後に「一人である」ことが最も多いのは、小学5年生では8.9%、中学2年生では9.3%、16-17歳になると約2倍の19.2%となる。

図表 4-1-7 平日の放課後（自由時間）に一緒に過ごすことが最も多い人：年齢層別



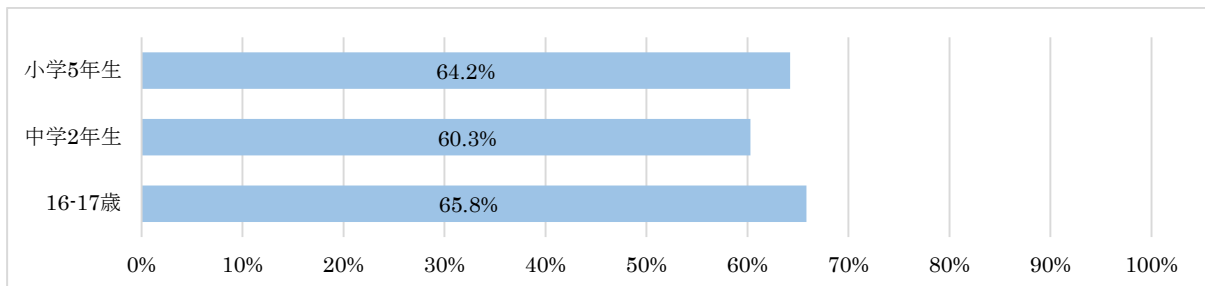
※「学童クラブ、その他の施設の先生」については16-17歳の子供は回答対象外。
 ※「アルバイトなど職場の人」については、16-17歳の子供のみ回答。

(2) 休日の過ごし方

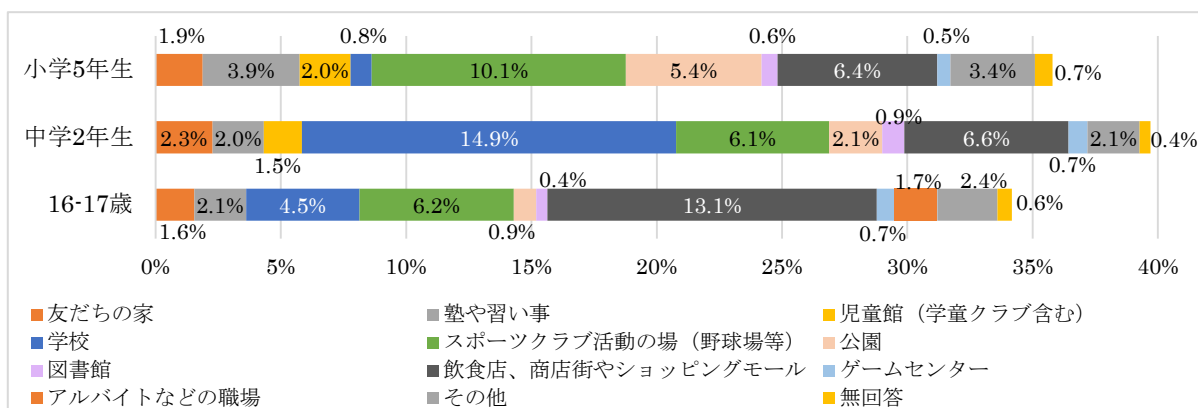
子供たちの休日の過ごし方を知るために、休日の午後に過ごすことが最も多い場所と、休日の午後を一緒に過ごすことが最も多い人について子供に聞いた。休日の午後に過ごすことが最も多い場所は、どの年齢層でも約6割が「自分の家」と答えている。次いで休日に過ごすことが多い場所は年齢によって異なり、小学5年生は「スポーツクラブの活動の場（野球場、サッカー場など）」（10.1%）、中学2年生は「学校」（14.9%）、16-17歳は「飲食店、商店街やショッピングモール」（13.1%）である。

休日の午後を一緒に過ごすことが最も多い人は、どの年齢層でも「家族」であるが、その割合は、年齢が上がるごとに低くなり、「学校の友達」と過ごす割合が高くなる。また、休日の午後を一人で過ごすことが最も多いとする子供の割合は、年齢が上がるごとに高くなり、小学5年生で2.1%、中学2年生で5.5%、16-17歳で14.7%となる。

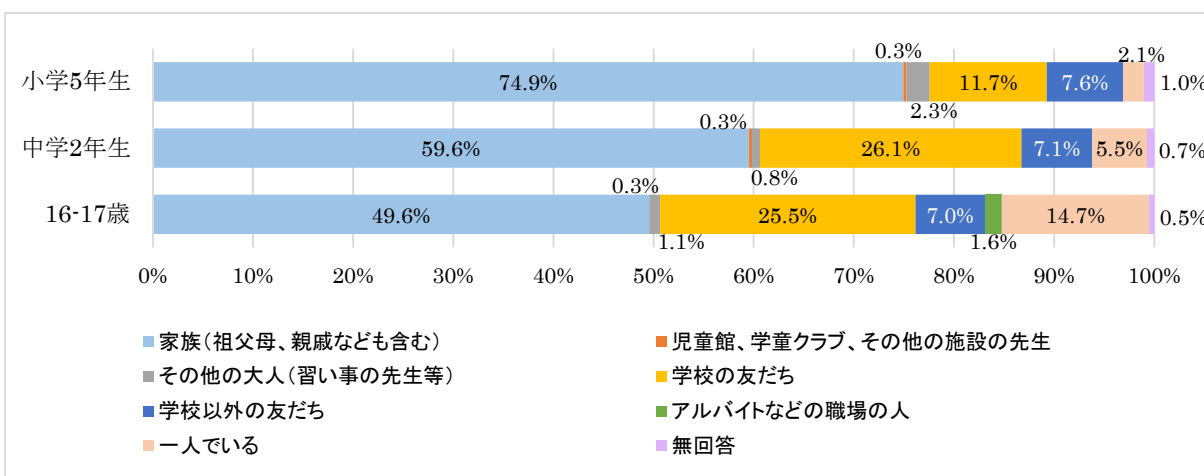
図表 4-1-8 休日の午後に過ごすことが最も多い場所(自分の家):年齢層別



図表 4-1-9 休日の午後に過ごすことが最も多い場所(自分の家以外):年齢層別



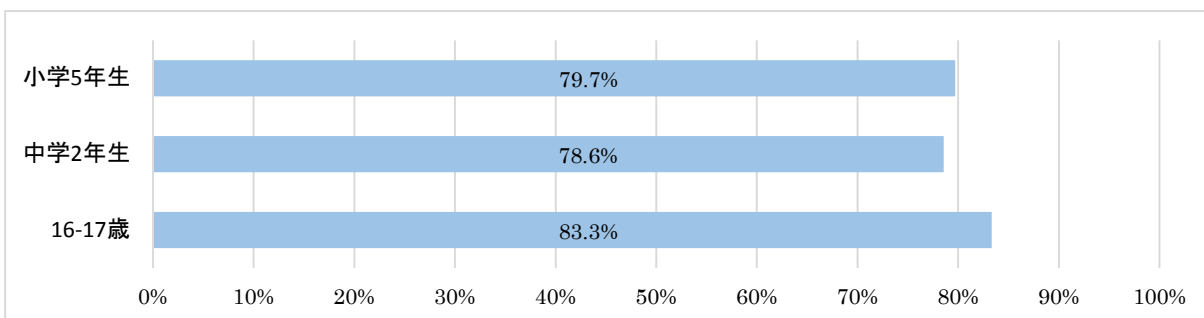
図表 4-1-10 休日の午後を一緒に過ごすことが最も多い人:年齢層別



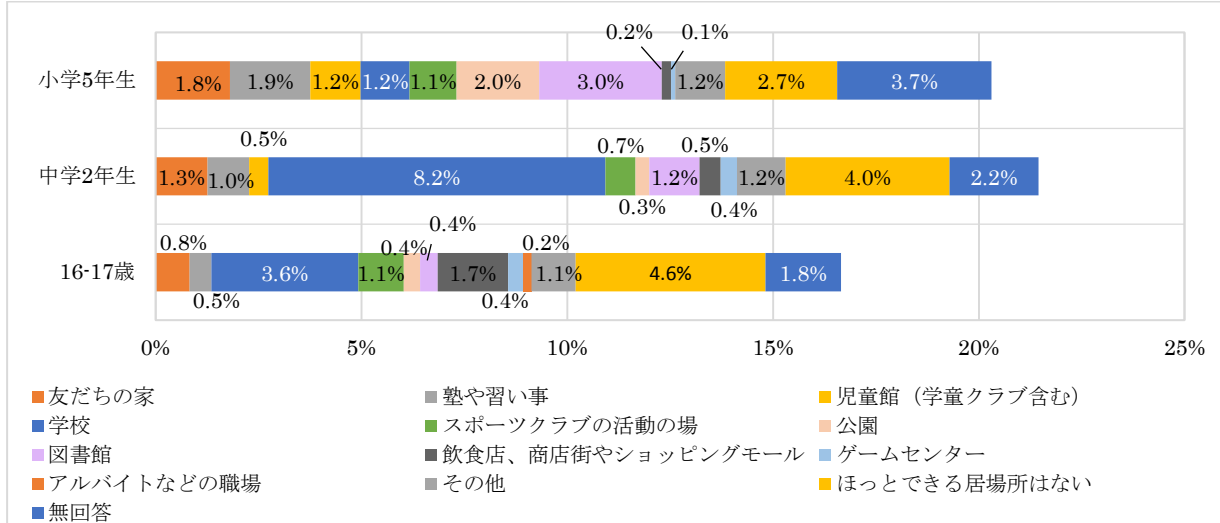
(3) 一番ほっとできる居場所

一番ほっとできる居場所はどこか、子供に聞いた。どの年齢層でも約8割が「自分の家」が一番ほっとできる場所と回答している。小学5年生では「図書館」(3.0%)、中学2年生では「学校」(8.2%)が2番目に高いが、3番目に高いのは「ほっとできる居場所はない」(小学5年生2.7%、中学2年生4.0%)である。16-17歳では「自分の家」に次いで「ほっとできる居場所はない」(4.6%)が高い。

図表 4-1-11 一番ほっとできる居場所(自分の家):年齢層別



図表 4-1-12 一番ほっとできる居場所(自分の家以外):年齢層別

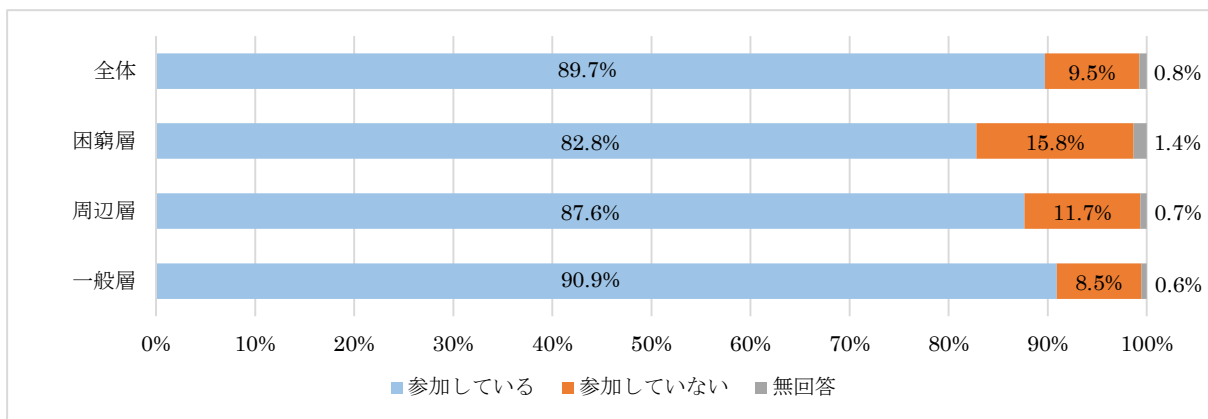


(4) 中高生のクラブ活動

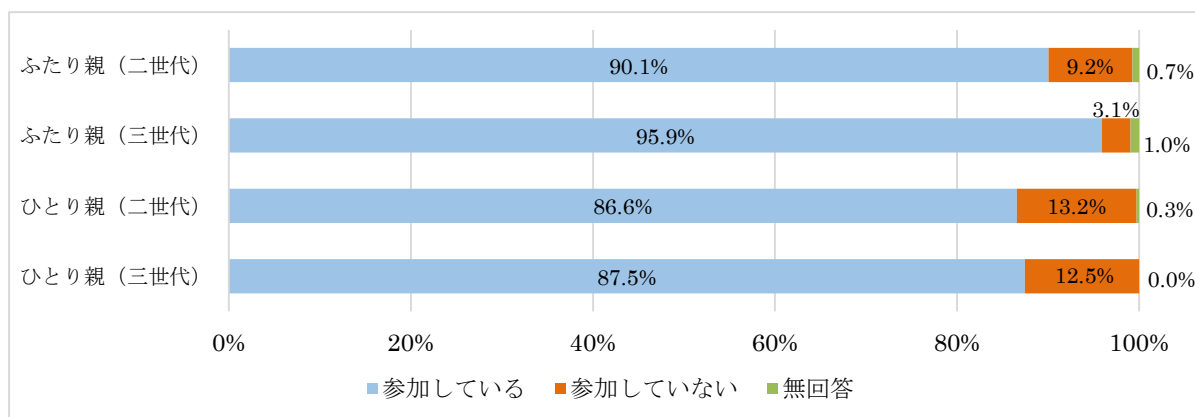
中学2年生にクラブ活動への参加について聞いた。中学2年生の89.7%がクラブ活動に参加している。しかし、生活困難度別では困窮層が、世帯タイプ別ではひとり親(二世帯)世帯が参加しない割合が高い(それぞれ15.8%、13.2%)。参加しない理由を生活困難度別に見ると、どの層においても「入りたいクラブがない」、「その他」の割合が高いが、困窮層では「家の事情(家族の世話、家事など)」(15.7%)が他の層に比べて約3倍から5倍である。このことから、経済的事情や家族の世話、家事負担などが中学生のクラブ活動への参加に影響していると考えられる。

16-17歳に学校や職場、地域のクラブやスポーツ活動への参加について聞いた。16-17歳の72.9%がクラブやスポーツ活動に参加しているが、困窮層(65.3%)、周辺層(65.6%)は、一般層(76.0%)に比べて参加率が約10ポイント低い。参加しない理由は、「入りたいクラブがない」がどの層でもいちばん高いが、二番目に高い理由は、一般層は「塾や習い事が忙しいから」が15.5%であるのに対し、困窮層、周辺層では、「アルバイトなど仕事が忙しいから」が25.3%、17.7%、「費用がかかるから」が18.1%、8.5%であり、経済的事情が16-17歳のクラブやスポーツ活動への参加の妨げとなっていることがうかがえる。

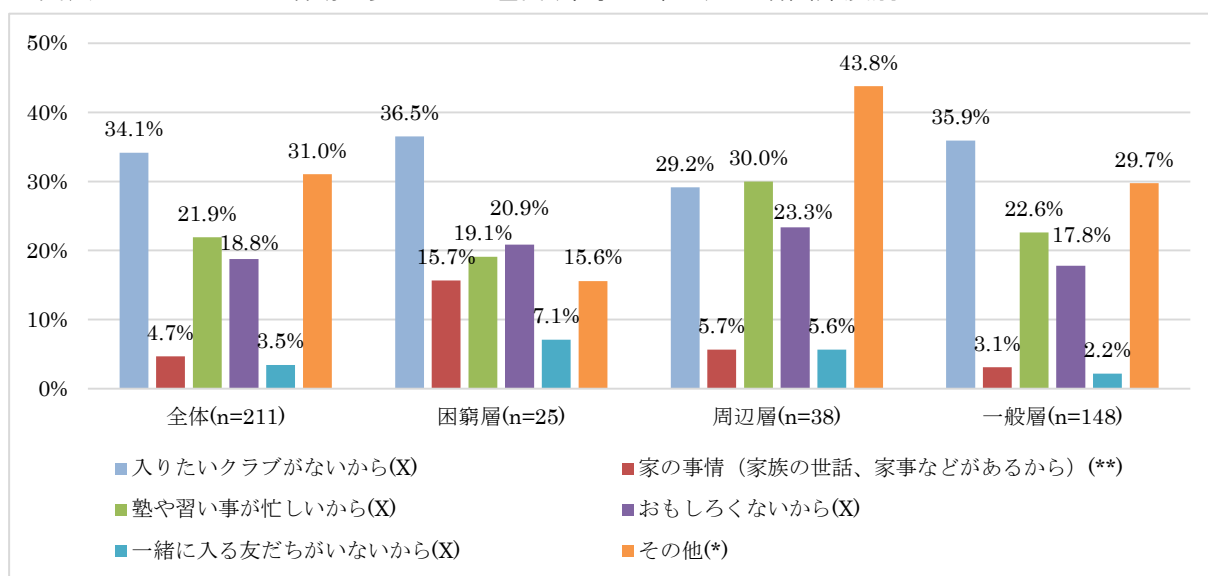
図表 4-1-13 クラブ活動への参加状況(中学2年生):生活困難度別(***)



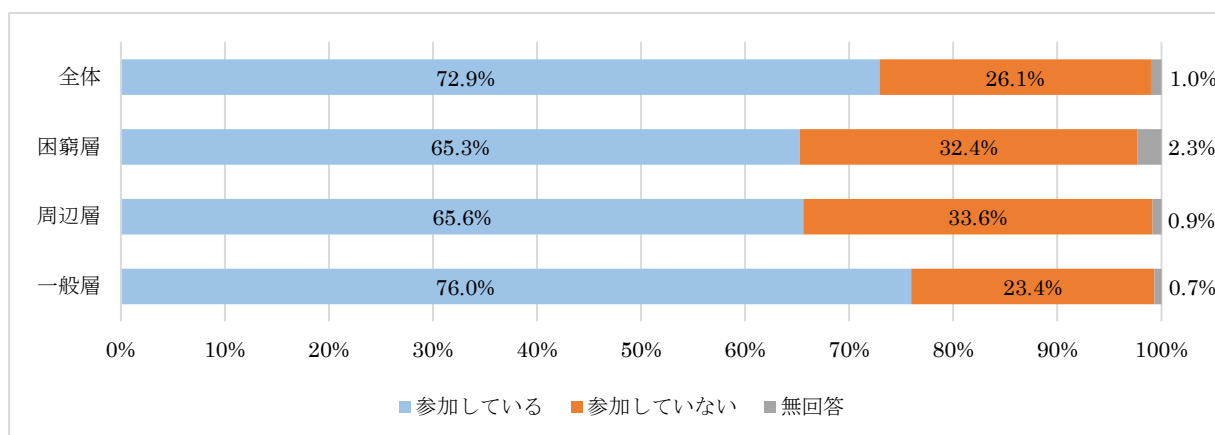
図表 4-1-14 クラブ活動への参加状況(中学2年生)世帯タイプ別



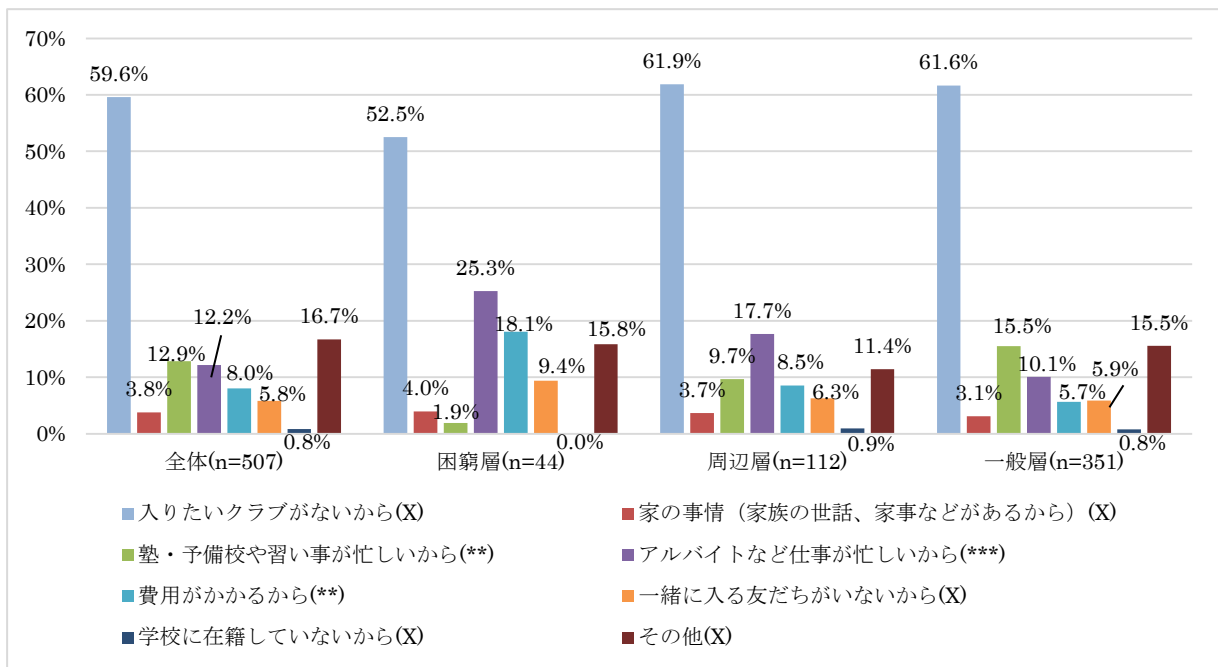
図表 4-1-15 クラブ活動に参加しない理由(中学2年生):生活困難度別



図表 4-1-16 学校や職場・地域のクラブやスポーツ活動への参加状況(16-17歳):生活困難度別(***)



図表 4-1-17 学校や職場・地域のクラブやスポーツ活動に参加しない理由(16-17 歳)



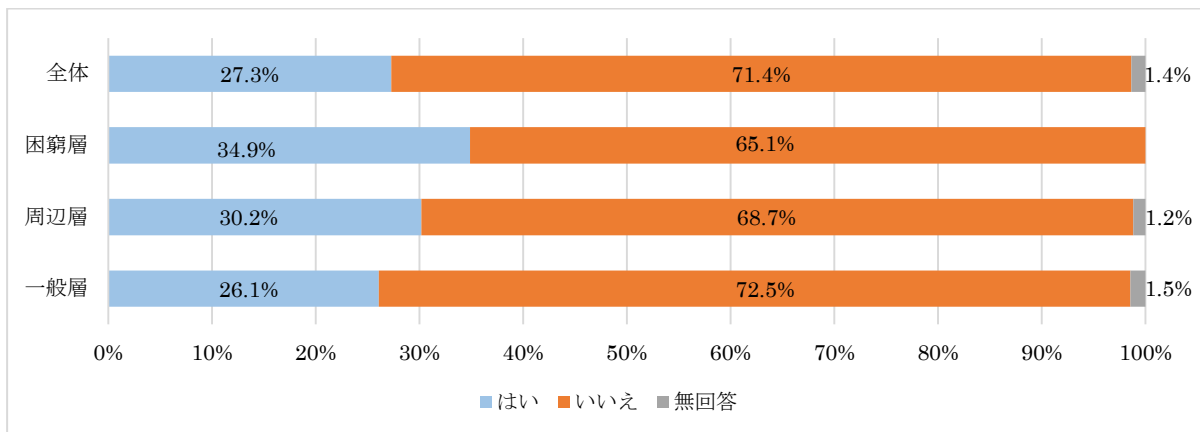
(5) 放課後子供教室

子供に「放課後子供教室」の参加状況について聞いたところ、小学5年生で「放課後子供教室」に参加しているのは27.3%である。

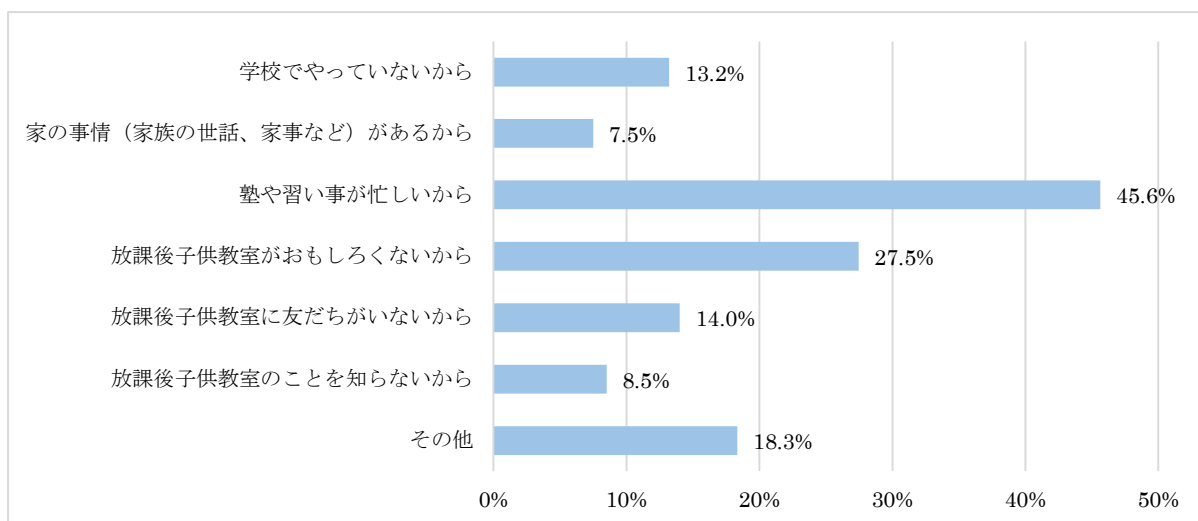
生活困難度別に見ると、困窮層の子供の方が「放課後子供教室」に参加している割合が一般層、周辺層より高い。また、「放課後子供教室」に参加しない理由としては、「塾や習い事が忙しいから」が45.6%で最も高い。その一方で、「家の事情(家族の世話、家事など)があるから」という支援の必要性をうかがわせる理由も7.5%あった。

「家以外で平日の放課後に夜までいることができる場所」、「家以外で休日にいることができる場所」へのニーズが比較的高いことから(本報告書第7部参照)、放課後子供教室については、ニーズはありつつも利用できない子供がいることがわかる。

図表 4-1-18 「放課後子供教室」への参加状況(小学5年生):生活困難度別(**)



図表 4-1-19 「放課後子供教室」に参加しない理由(複数回答n=2,005)(小学 5 年生)



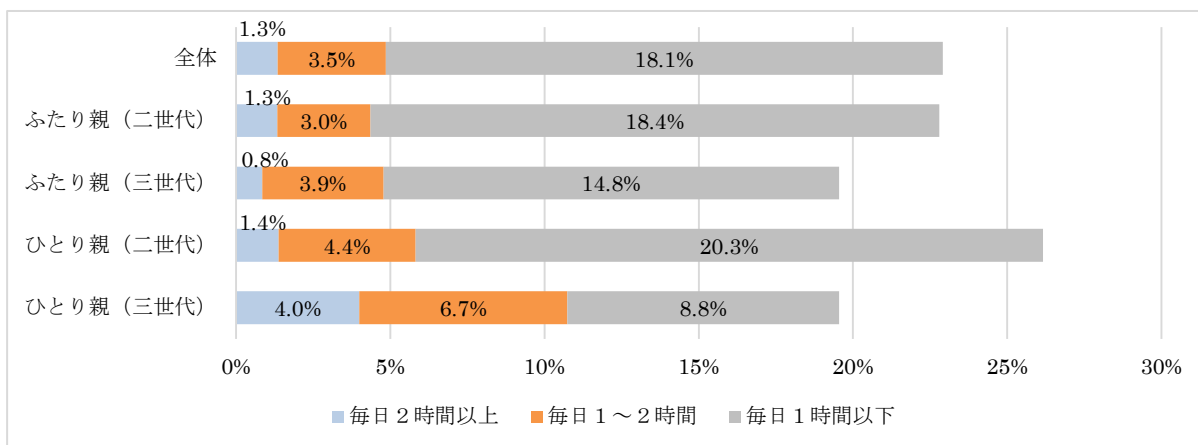
(6) 家事負担・家族の世話

子供に家事負担や家族の世話の頻度について聞いたところ、中学 2 年生では、困窮層の子供が家事負担・家族の世話を担っている割合が高いことがわかった。毎日 1 時間以上家事をする中学 2 年生は、全体では 4.8%であるものの、困窮層では 9.6%であり、一般層 (3.9%) の約 3 倍である。また、家族の世話を毎日 1 時間以上する中学 2 年生は 6.0%で、世帯タイプ別の有意差はないものの、ひとり親 (三世代) 世帯では「毎日 2 時間以上」が 8.2%にもなっており、家族内での重要な役割を担っていることがうかがえる。三世代世帯であっても、ふたり親世帯ではこの傾向はない。

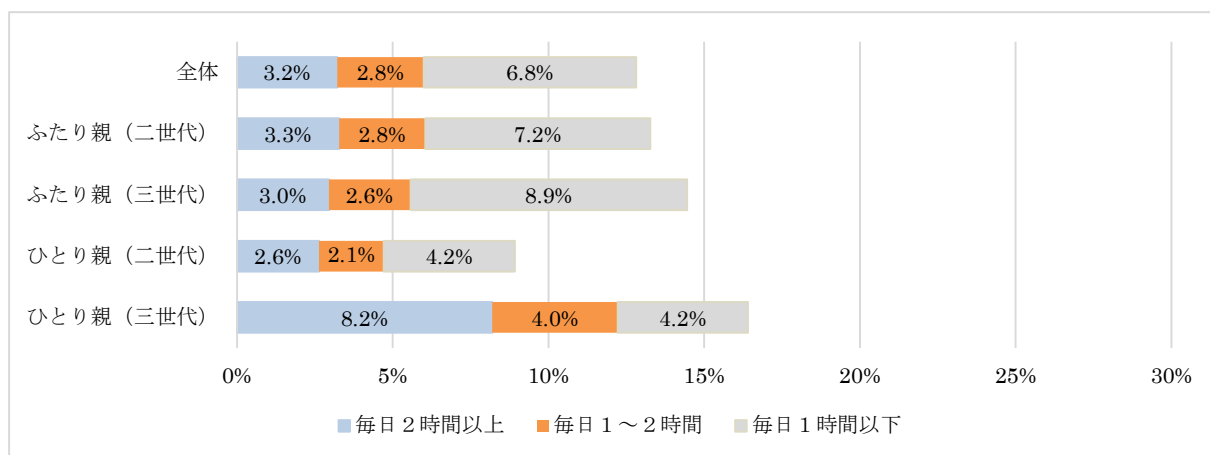
小学 5 年生は、家事 (洗濯、掃除、料理、片付けなど) や、家族の世話 (兄弟姉妹の世話や祖父母の介護) を毎日する小学 5 年生は 4 人に 1 人程度で、生活困難度別、世帯タイプ別に統計的な有意差はない。

また、16-17 歳は、毎日 1 時間を超えて家事をするのは 6.1%、家族の世話をするのは 3.1%であり、生活困難度別、世帯タイプ別に統計的な有意差はない。

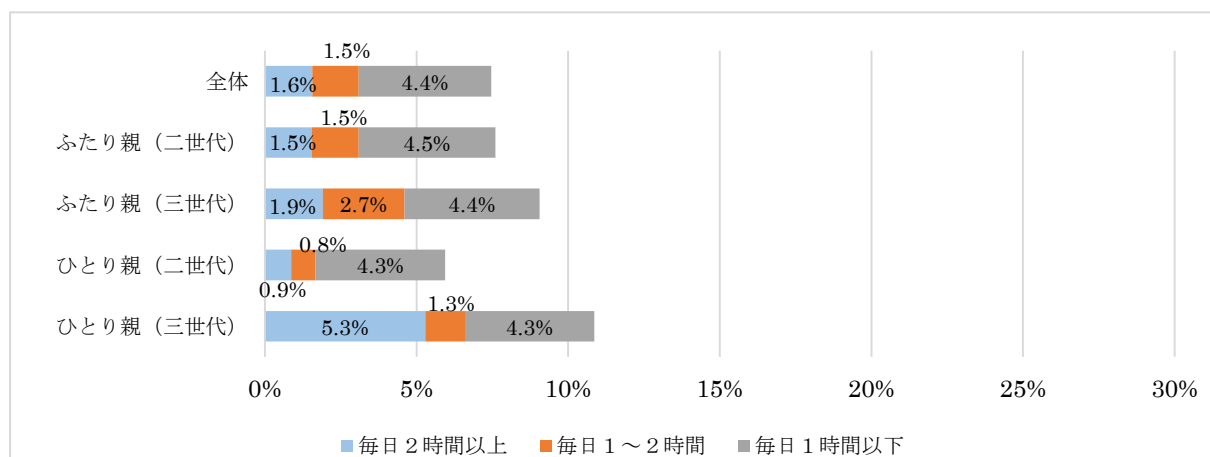
図表 4-1-20 家事をする頻度(中学 2 年生):全体、世帯タイプ別(***)



図表 4-1-21 家族の世話をする頻度(中学 2 年生):全体、世帯タイプ別(X)



図表 4-1-22 家族の世話をする頻度(16-17 歳):全体、世帯タイプ別(X)

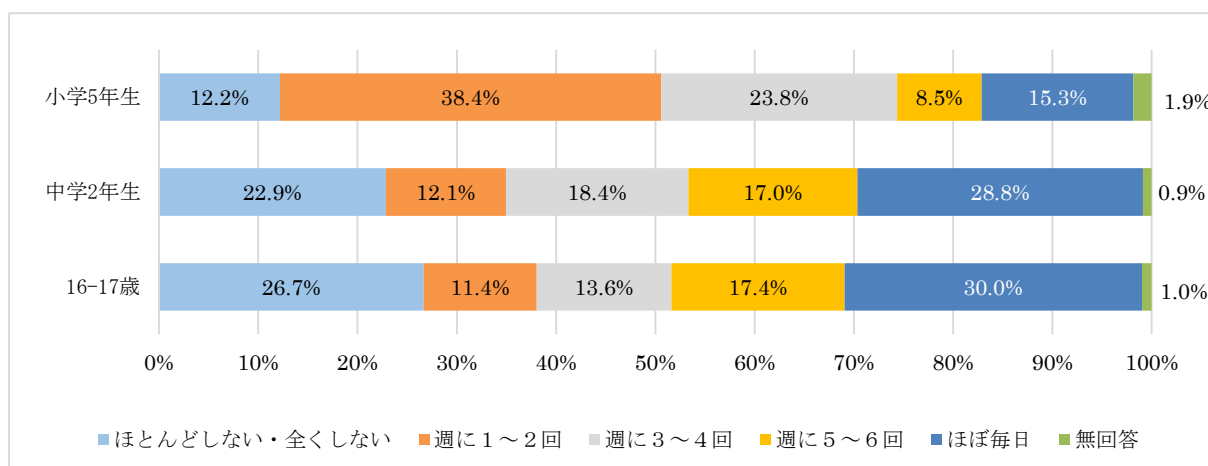


(7) 運動

子供に「30分以上身体を動かす遊びや運動、習い事を、1週間でどれくらいするか」を聞いたところ、小学 5 年生の 86.0%が週に 1 回以上と答えているが、12.2%は「ほとんどしない・全くしない」と答えている。「ほとんどしない・全くしない」子供の割合は、中学 2 年生では 22.9%、16-17 歳では 26.7%である。

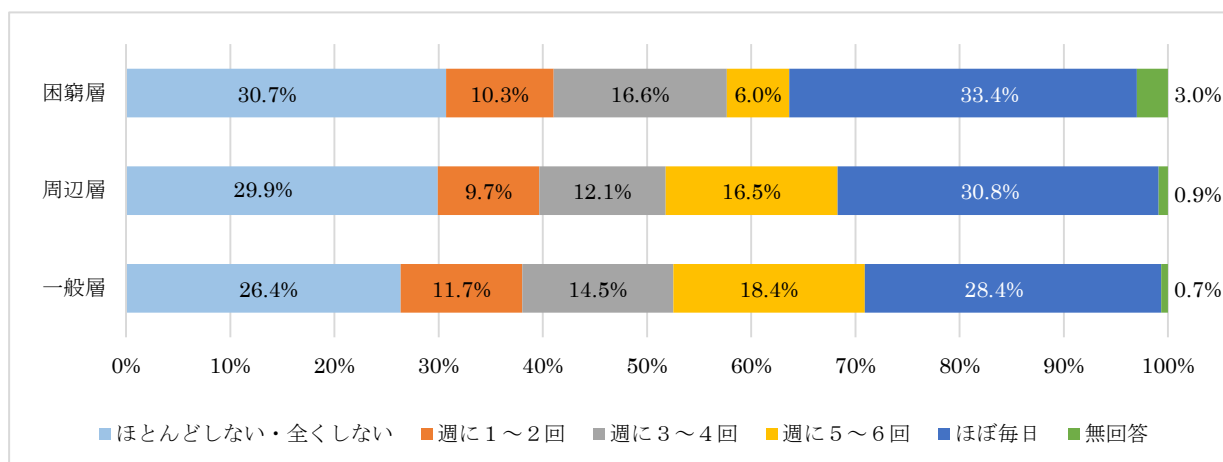
生活困難度別と世帯タイプ別には、小学 5 年生、中学 2 年生では統計的に有意な差はない。困窮層の 16-17 歳の運動の頻度は、33.4%は毎日 30 分以上運動しているものの、ほぼ同率 30.7%は「ほとんどしない・全くしない」となっている。

図表 4-1-23 30 分以上の身体を動かす遊びや習い事※(年齢層別)



※16-17歳は、「30分以上の運動や身体を動かす習い事」

図表 4-1-24 30 分以上の運動や身体を動かす習い事(16-17歳):生活困難度別(***)

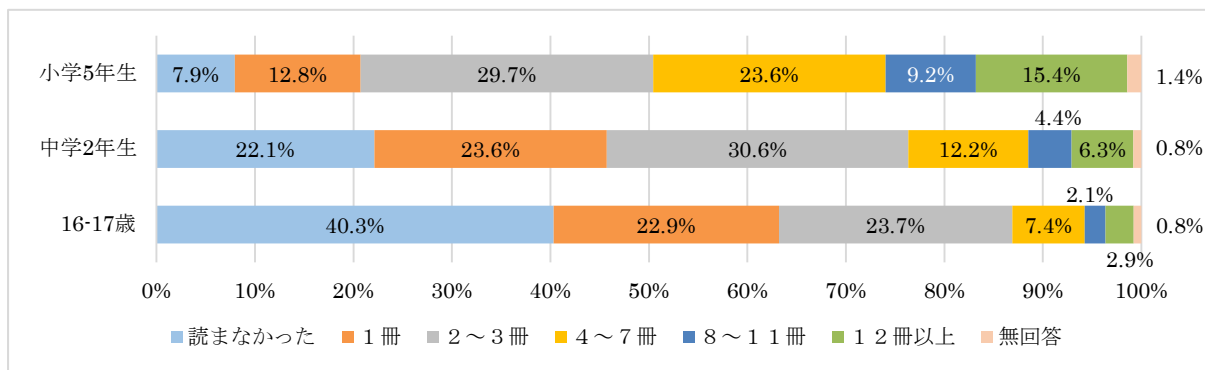


(8) 読書

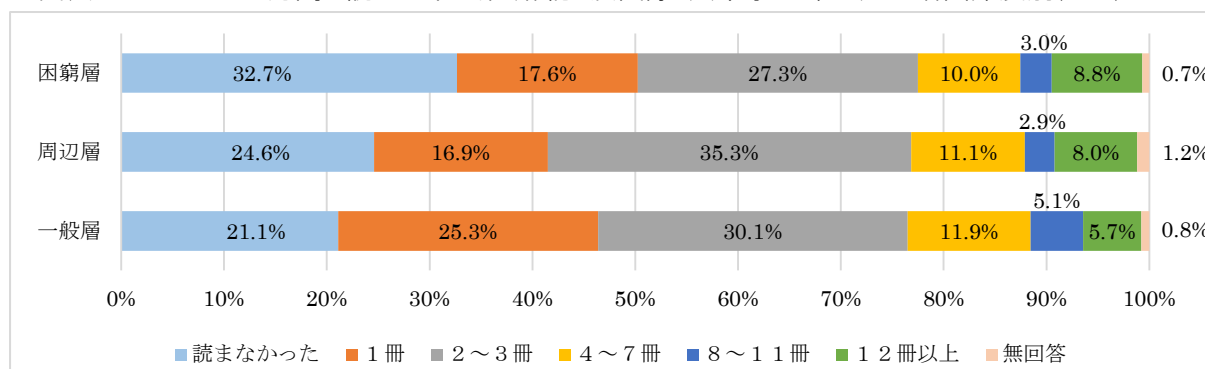
子供に1か月の間に読む本の冊数を聞いた。小学5年生では「2～3冊」が29.7%で最も高く、次に「4～7冊」が23.6%となっているが、7.9%は「読まなかった」と回答している。「読まなかった」という子供の割合は、年齢とともに増加し、中学2年生では22.1%、16-17歳では40.3%となっている。

生活困難度別に見ると、中学2年生では、生活困難度が高くなるほど読書の習慣がない傾向があるものの、困窮層、周辺層のうち約8～9%が過去1か月に「12冊以上本を読んだ」と回答している。16-17歳においては、困窮層の約6割(59.0%)が本を1か月の間に1冊も読んでいない。小学5年生では統計的な有意差は見られないことから、生活困難度の読書への影響は、中学生以降で現れてくることがわかる。

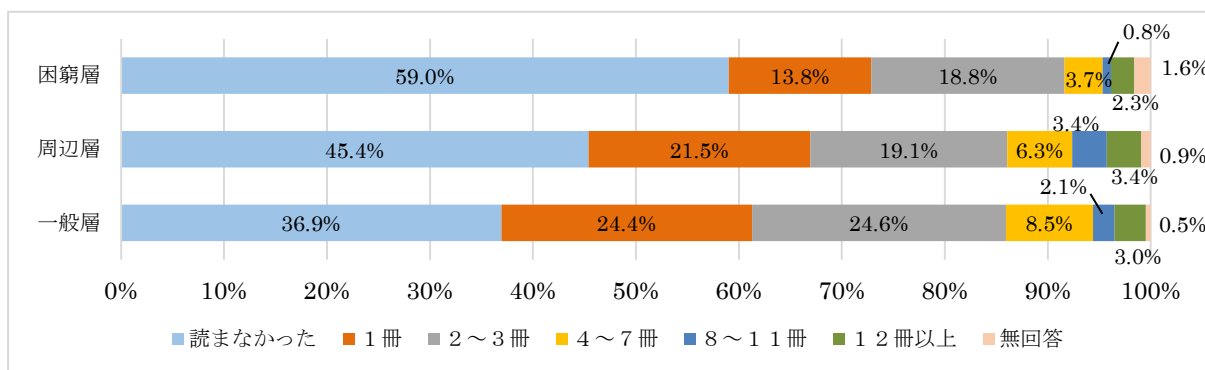
図表 4-1-25 1 か月間に読んだ本の数(雑誌・漫画除く):年齢層別



図表 4-1-26 1 か月間に読んだ本の数(雑誌・漫画除く)(中学2年生):生活困難度別(***)



図表 4-1-27 1 か月間に読んだ本の数(雑誌・漫画除く)(16-17歳):生活困難度別(***)



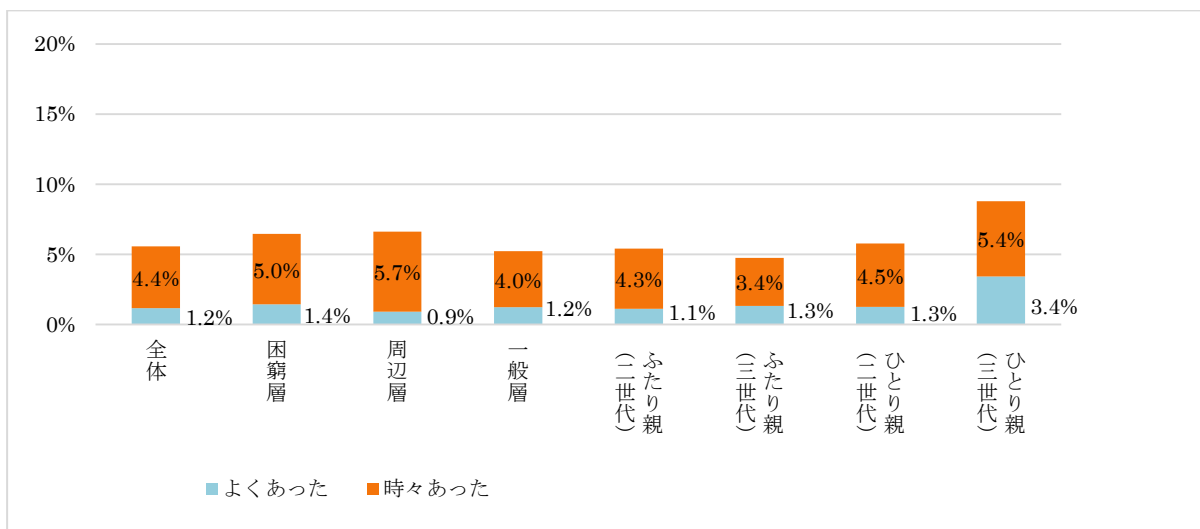
2 夕方以降の留守番と母親の就労時間

(1) 夜遅くまで子供だけで過ごした経験

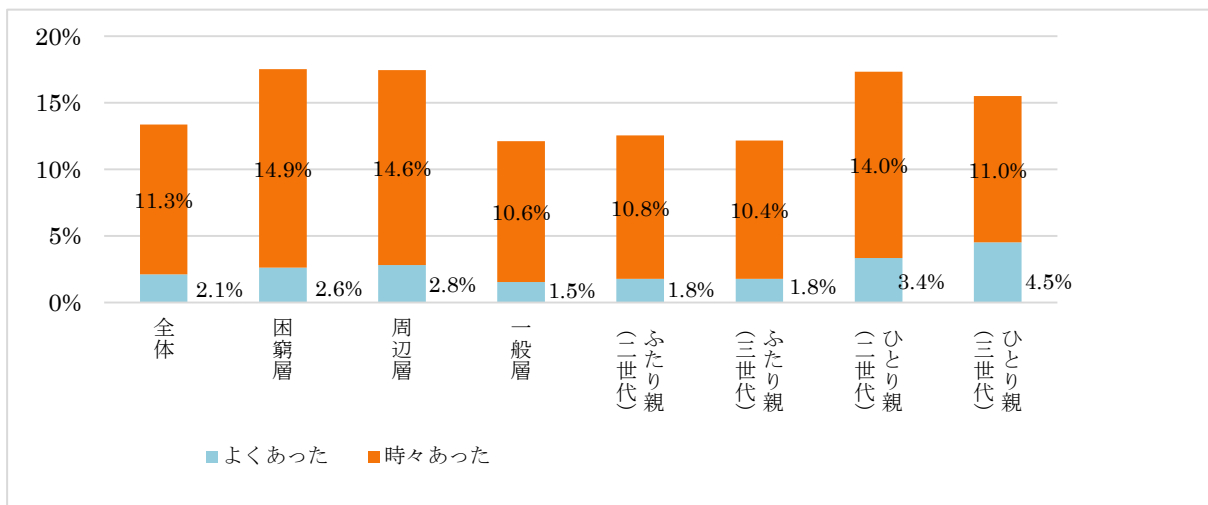
小学校5年生と中学校2年生の子供に「夜遅くまで子供だけで過ごした」ことがあったかを、「よくあった」、「時々あった」、「あまりなかった」、「なかった」、「わからない」の5つの選択肢で聞いた。小学5年生の1.2%が「よくあった」、4.4%が「時々あった」と答えており、合わせて5.6%が夜遅くまで子供だけで過ごした経験がある。生活困難度別に見ると困窮層、周辺層ではその割合は約6%~7%で、世帯タイプ別に見るとひとり親(三世帯)世帯の小学5年生では8.8%となっている。

中学2年生になると、夜遅くまで子供だけで過ごした経験がある割合は、小学5年生の約2倍の13.4%（「よくあった」2.1%、「時々あった」11.3%）となり、困窮層、周辺層、ひとり親(二世帯)世帯では約2割になる。

図表 4-2-1 夜遅くまで子供だけで過ごした経験(小学5年生):生活困難度別(**)・世帯タイプ別(X)



図表 4-2-2 夜遅くまで子供だけで過ごした経験(中学2年生):生活困難度別(*)・世帯タイプ別(X)

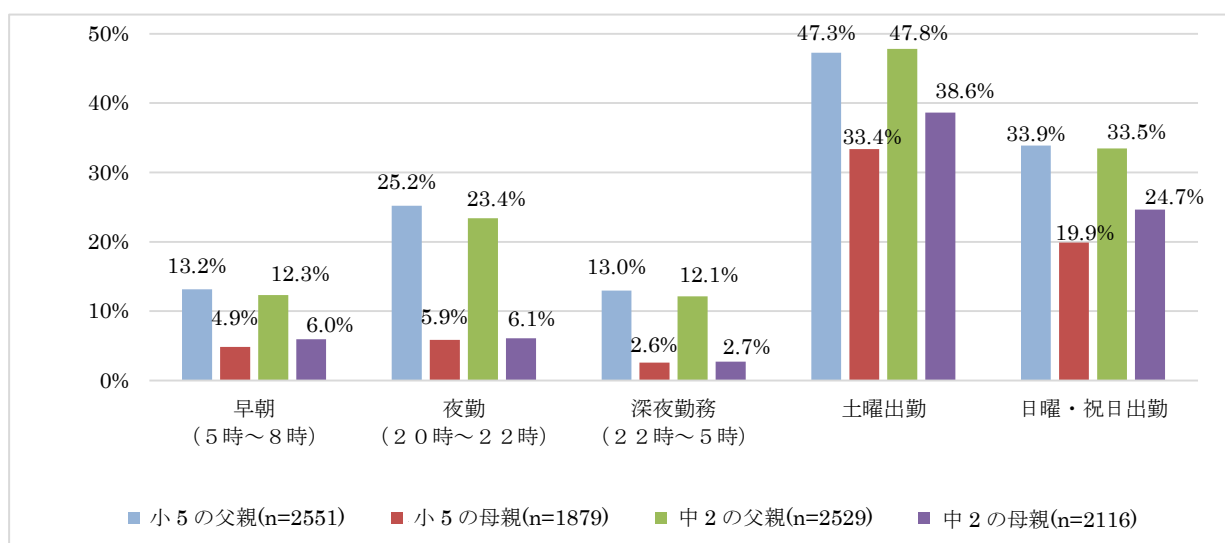


(2) 母親の平日日中以外の就労

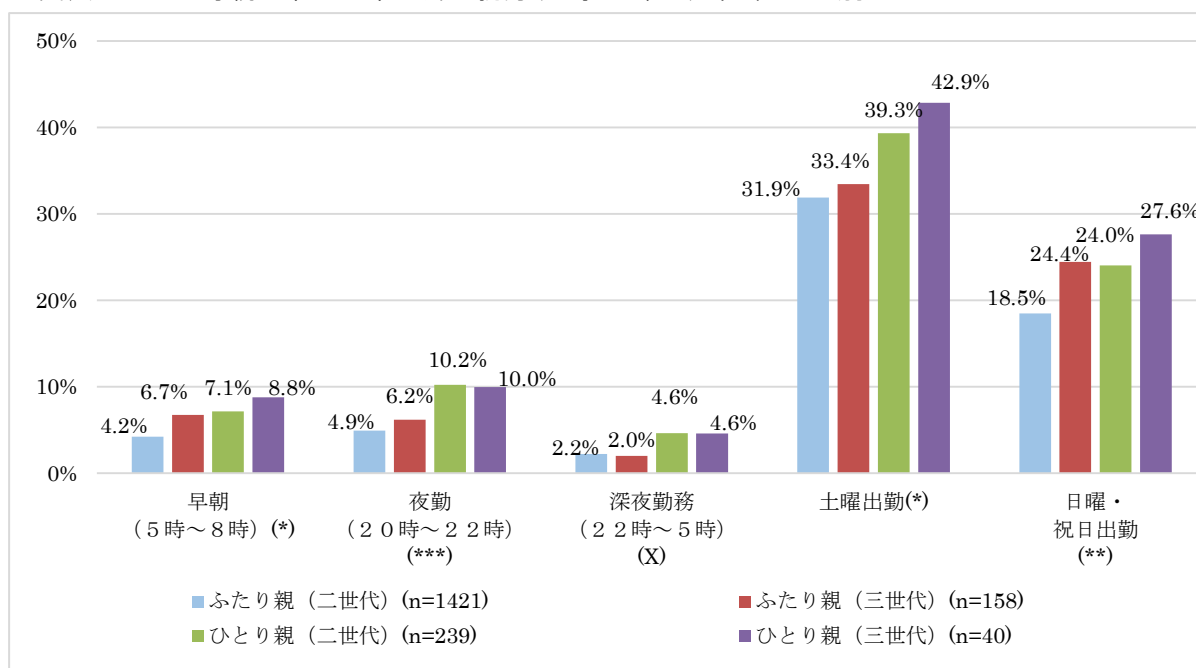
夜遅くまで子供だけで過ごした経験は、親の就労時間、とりわけ母親の就労時間と関係があると考えられる。そこで、就労時間について、就労をしている保護者に聞いたところ、就労している小中学生の母親のうち約3%～6%は早朝勤務、夜勤、深夜勤務をすることがあると回答している。父親、母親ともに土曜出勤、日曜・祝日出勤も約2割～5割の割合で見られる。

小学5年生の母親の「夜勤(20時～22時)」は、ひとり親世帯(二世帯、三世帯)で約1割になる。また、中学2年生のひとり親(二世帯)世帯の母親も約1割が早朝勤務、夜勤をしており、ひとり親(三世帯)世帯の母親は16.0%が夜勤をしている。ひとり親世帯の母親はふたり親世帯の母親に比べて土曜出勤の割合が高いことがうかがえる。

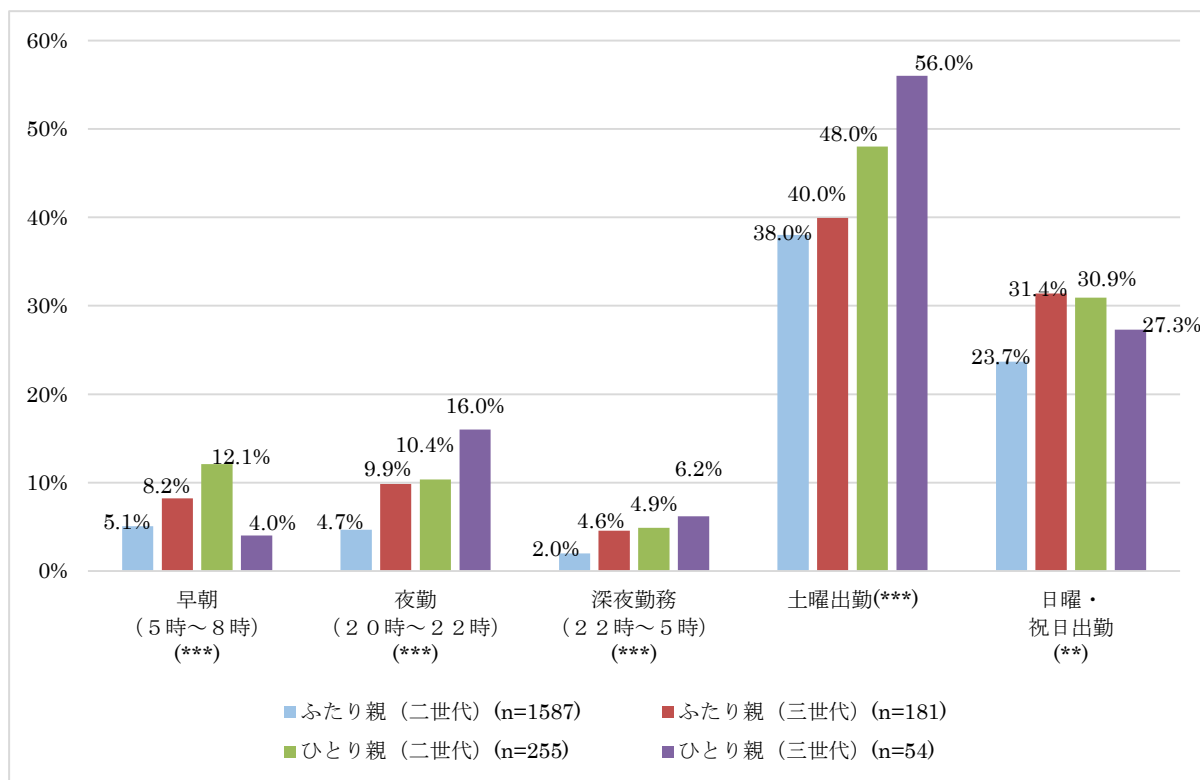
図表 4-2-3 父母の平日日中以外の就労(小学5年生、中学2年生)



図表 4-2-4 母親の平日日中以外の就労(小学5年生):世帯タイプ別



図表 4-2-5 母親の平日日中以外の就労(中学 2 年生):世帯タイプ別

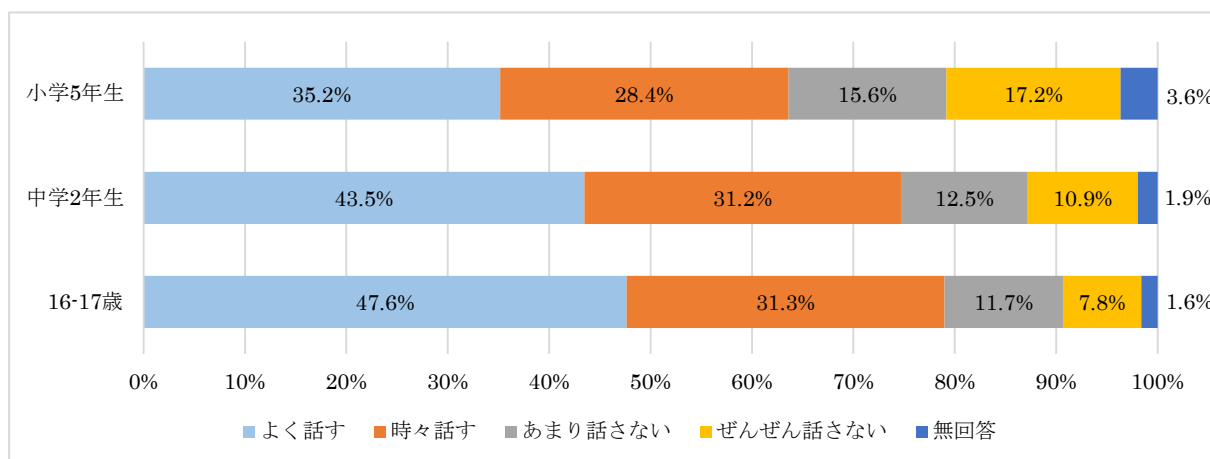


3 友人関係・孤立

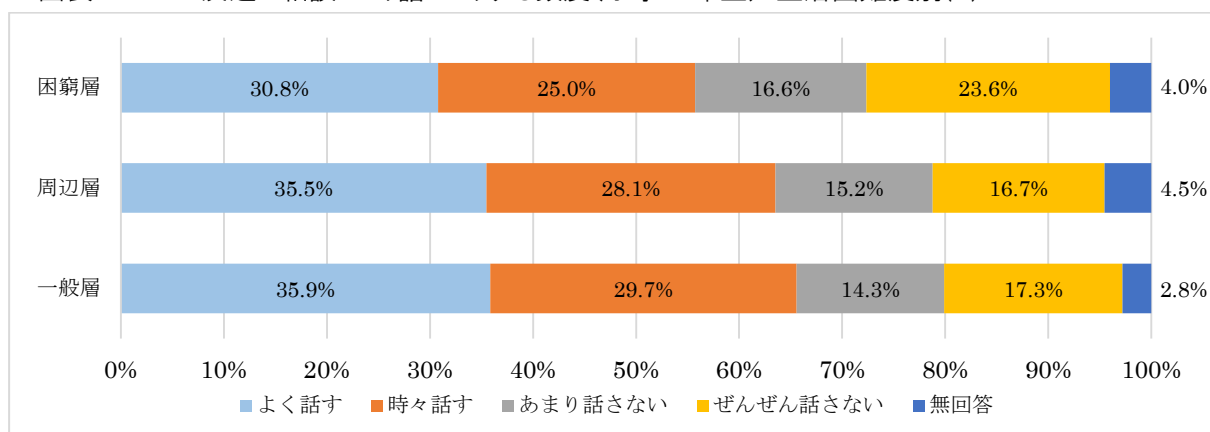
(1) 友人との会話頻度

子供の友人関係・孤立の状況を見るために、まず、子供が困っていることや悩んでいること、楽しいことや悲しいことについて、友達にどのくらい話しているのかを聞いた。小学5年生の全体では、友達に「よく話す」とした割合は35.2%、「時々話す」とした割合は28.4%であり、63.6%の小学5年生は友達に相談したり話したりしている。友達と「良く話す」、「時々話す」割合は、中学2年生では74.7%、16-17歳で78.9%と、年齢が高くなるほど友達との会話の割合が高い。その一方で、小学5年生の17.2%、中学2年生の10.9%、16-17歳の7.8%が「ぜんぜん話さない」（16-17歳は「ぜんぜん話さない」と「該当する人がいない」の合計）と回答しており、友人から孤立している子供が存在している。友人との会話頻度を生活困難度別に見ると、小学5年生の困窮層の40.2%、中学2年生の困窮層の30.5%が「あまり話さない」、「ぜんぜん話さない」と回答しているが、統計的に有意な差はない。

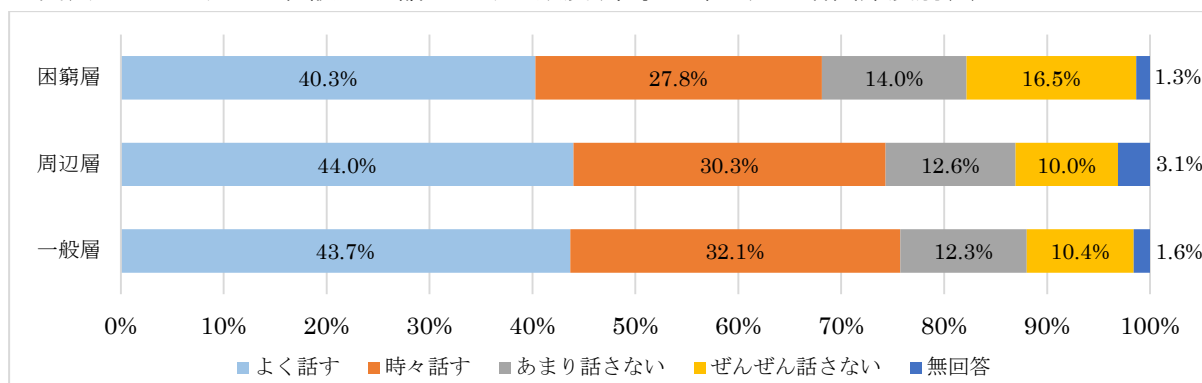
図表 4-3-1 友達に相談したり話したりする頻度：年齢層別



図表 4-3-2 友達に相談したり話したりする頻度(小学5年生)：生活困難度別(X)



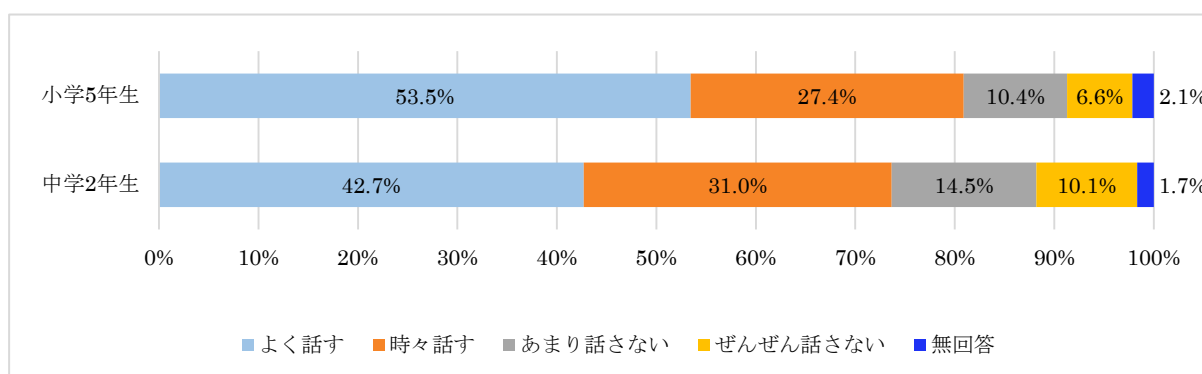
図表 4-3-3 友達に相談したり話したりする頻度(中学 2 年生):生活困難度別(X)



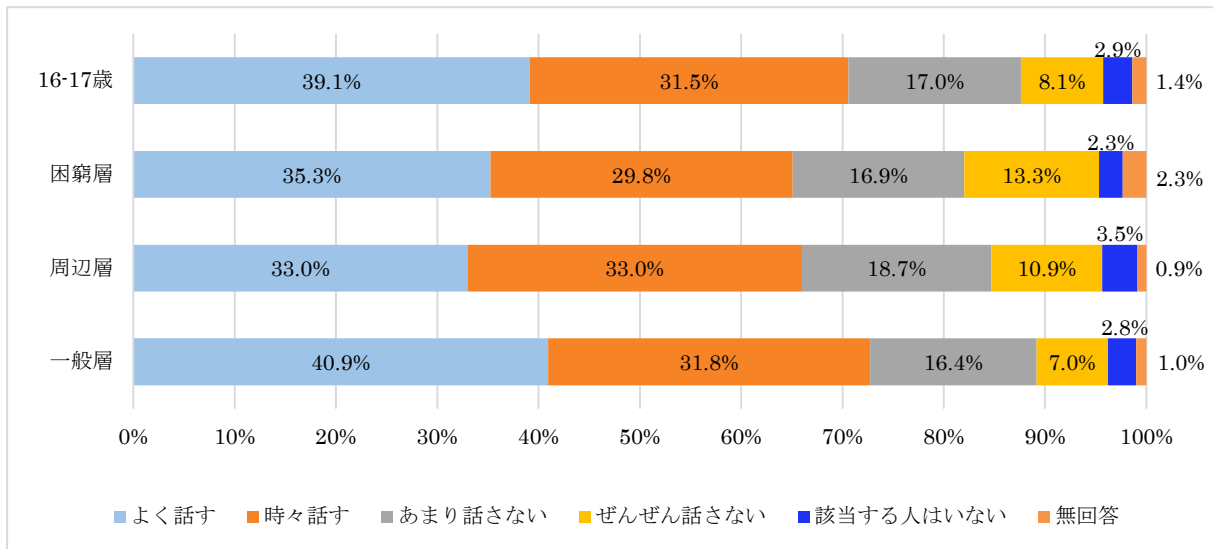
(2) 親との会話頻度

子供に困っていることや悩んでいること、楽しいことや悲しいことについて、周囲の大人、特に親や学校の先生にどのくらい話しているのかを聞いた。親と話す(「よく話す」、「時々話す」)割合は、小学 5 年生で 80.9%、中学 2 年生で 73.7%、16-17 歳で 70.6%と、年齢が高くなるほど親に話す子供の割合は低くなる。親に「ぜんぜん話さない」とした割合は、小学 5 年生では 6.6%、中学 2 年生では 10.1%、16-17 歳では 8.1%である。生活困難度別には、16-17 歳の困窮層で 13.3%が親に「ぜんぜん話さない」としており、一般層の約 2 倍となっている。小学 5 年生、中学 2 年生では統計的に有意な差は見られなかった。

図表 4-3-4 親に相談したり話したりする頻度(小学 5 年生・中学 2 年生)



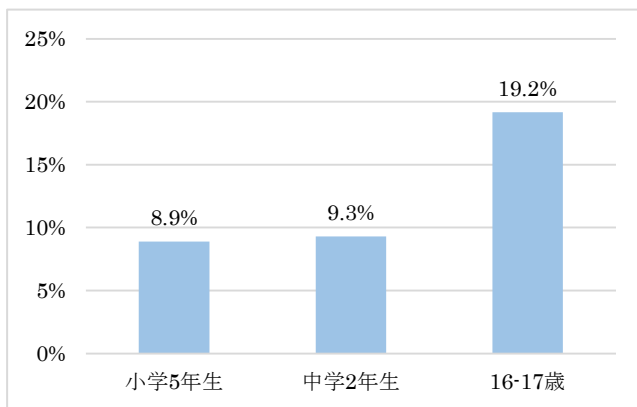
図表 4-3-5 親に相談したり話したりする頻度(16-17 歳):全体+生活困難度別(**)



(3) 孤独感

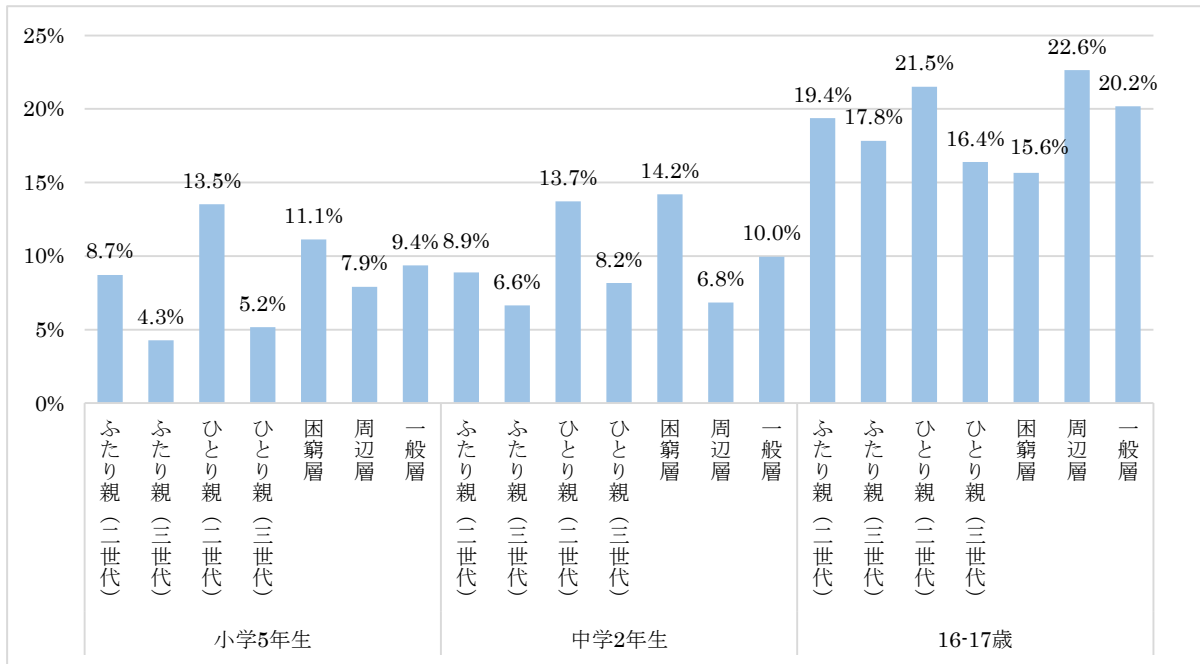
平日の放課後に一緒に過ごすことが一番多い人を子供に聞いたところ、小学5年生の8.9%、中学2年生の9.3%が「一人である」と回答している。この割合は、16-17歳では19.2%となる。世帯タイプ別、生活困難度別に見ると、「一人である」ことが一番多いと答えた割合が高いのは、小学5年生ではひとり親(二世帯)世帯(13.5%)、困窮層(11.1%)、中学2年生ではひとり親(二世帯)世帯(13.7%)、困窮層(14.2%)、16-17歳ではひとり親(二世帯)世帯(21.5%)、周辺層(22.6%)の子供であった。

図表 4-3-6 平日の放課後※に「一人である」ことが一番多い子供の割合(年齢層別)



※16-17歳は、「平日の自由時間(学校の放課後や仕事がない時)」

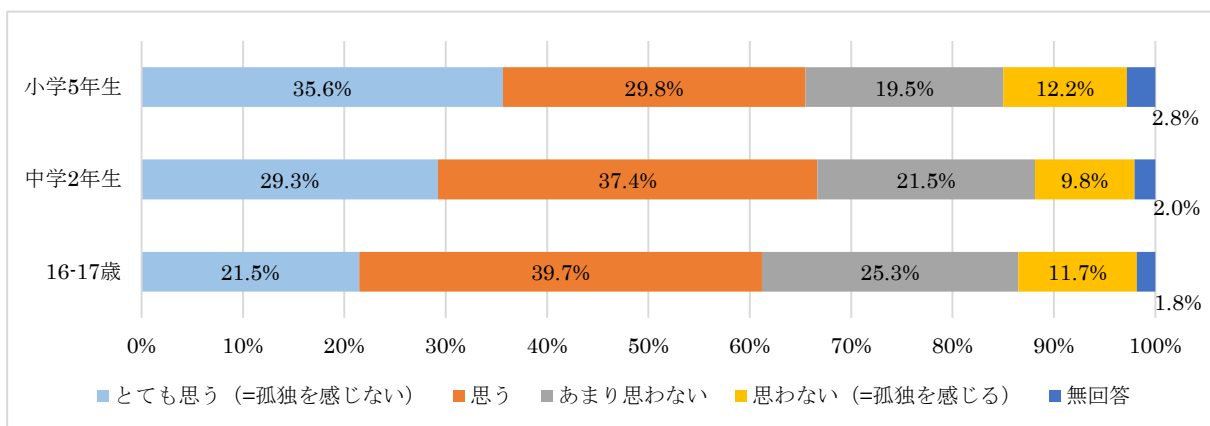
図表 4-3-7 平日の放課後※に「一人である」ことが一番多い子供の割合：年齢層別
世帯タイプ別、生活困難度別



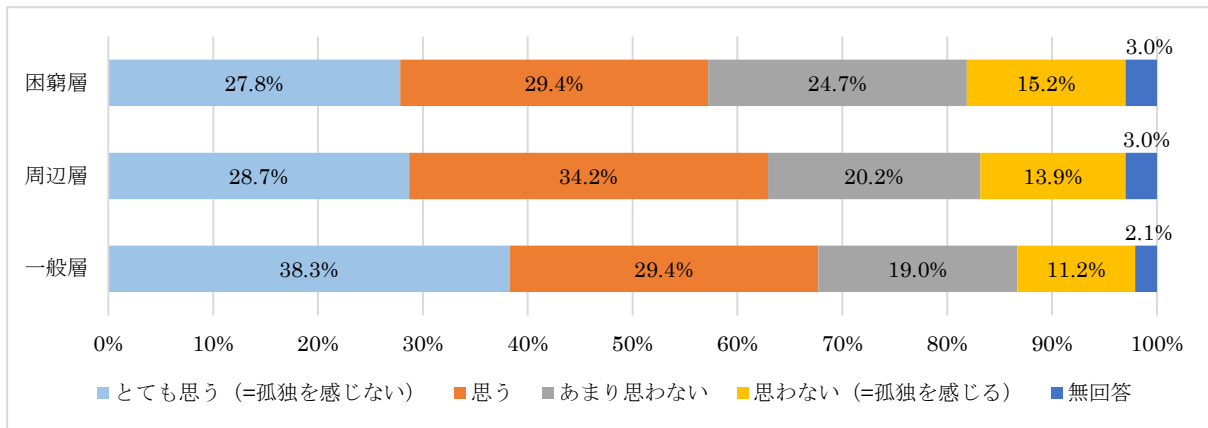
※16-17歳は、「平日の自由時間（学校の放課後や仕事がない時）」

「孤独を感じることはないか」との問いに「思わない」、「あまり思わない」（＝孤独を感じる）と答えた子供は、全体では、小学5年生は31.7%、中学2年生は31.3%、16-17歳では37.0%であった。困窮層では、小学5年生は39.9%、中学2年生では42.2%、16-17歳で43.9%であり、一般層との差は約8ポイントから12ポイントになる。

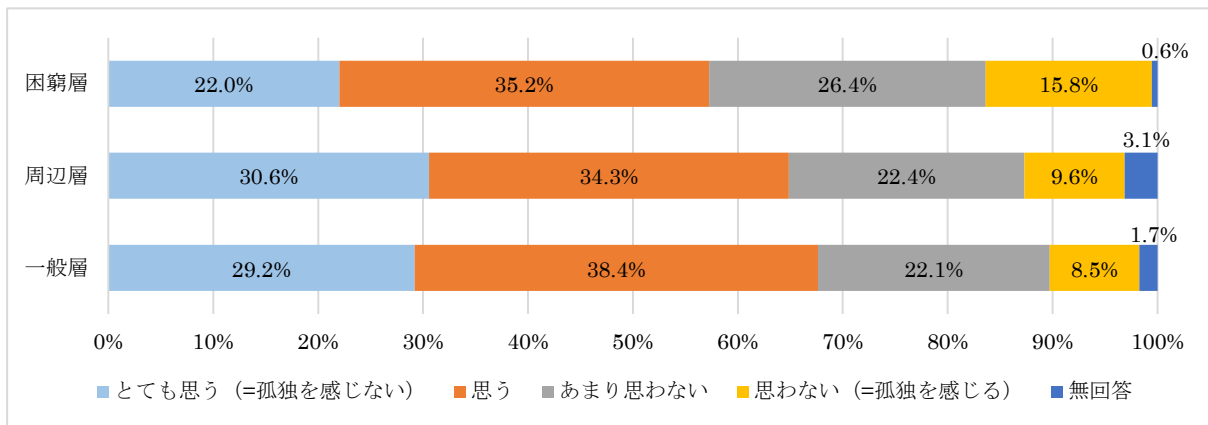
図表 4-3-8 孤独を感じることはない：年齢層別



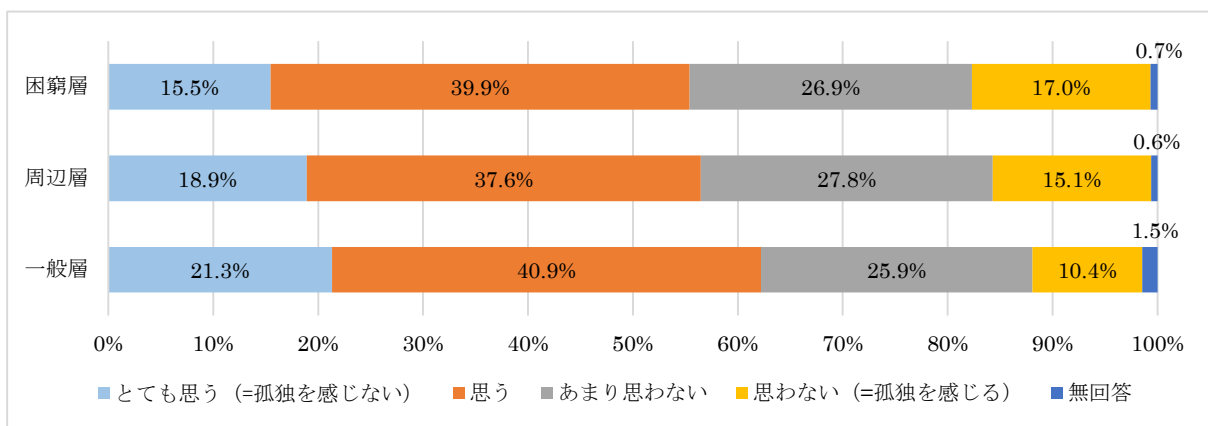
図表 4-3-9 孤独を感じることはない(小学 5 年生):生活困難度別(**)



図表 4-3-10 孤独を感じることはない(中学 2 年生):生活困難度別(**)



図表 4-3-11 孤独を感じることはない(16-17 歳):生活困難度別(*)

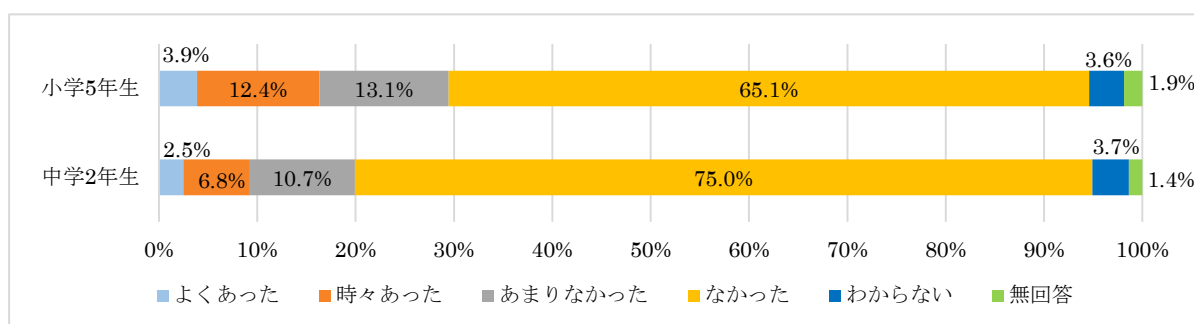


4 いじめ・不登校の悩み

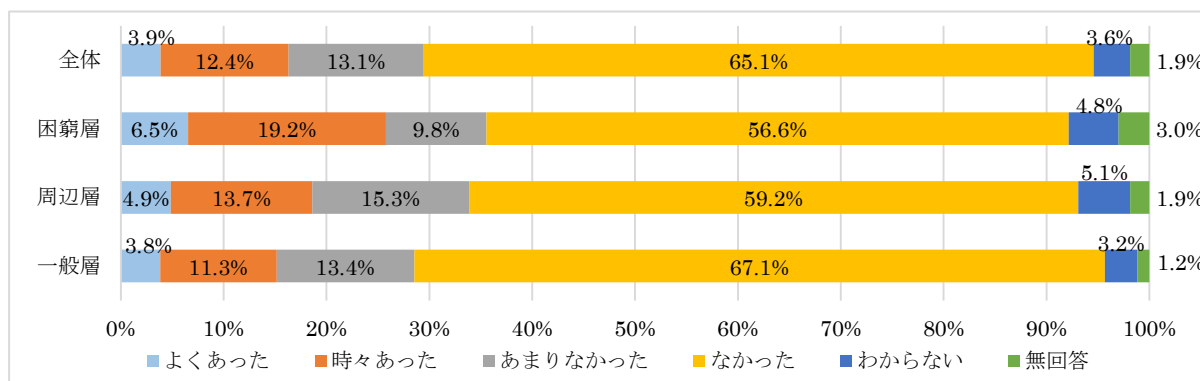
(1) いじめられた経験

子供に、これまでにいじめられた経験があったかを聞いたところ、「よくあった」と回答した小学5年生は3.9%であり、「時々あった」12.4%を合わせて16.3%がいじめられた経験があったとしている。また、中学2年生では、「よくあった」2.5%、「時々あった」6.8%を合わせて9.3%がいじめられた経験があったとしている。小学5年生では、生活困難度が高くなるほどいじめを経験した割合が増え、周辺層は18.6%、困窮層は25.7%がいじめられた経験をしている。中学2年生では生活困難度別に統計的に有意な差は見られないものの、困窮層の12.1%がいじめられた経験をしている。世帯タイプ別に有意差は見られない。

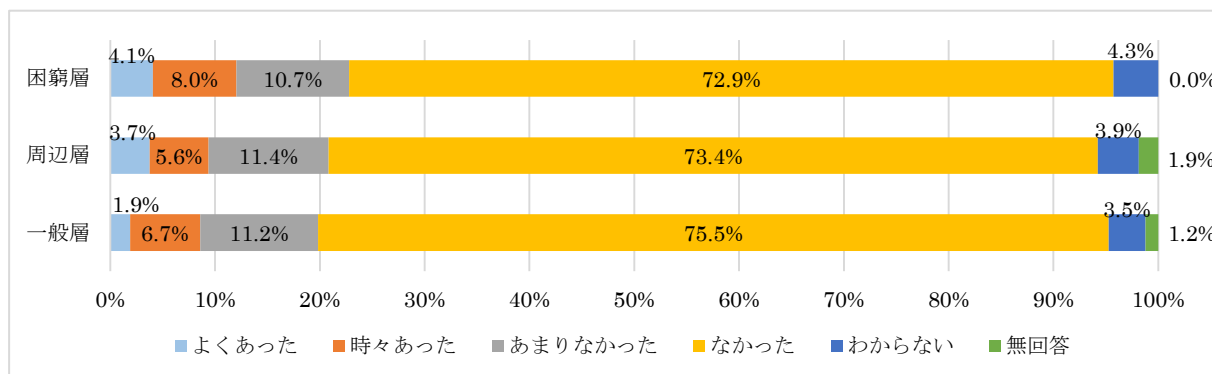
図表 4-4-1 いじめられた経験(小学5年生、中学2年生)



図表 4-4-2 いじめられた経験(小学5年生):生活困難度別(**)



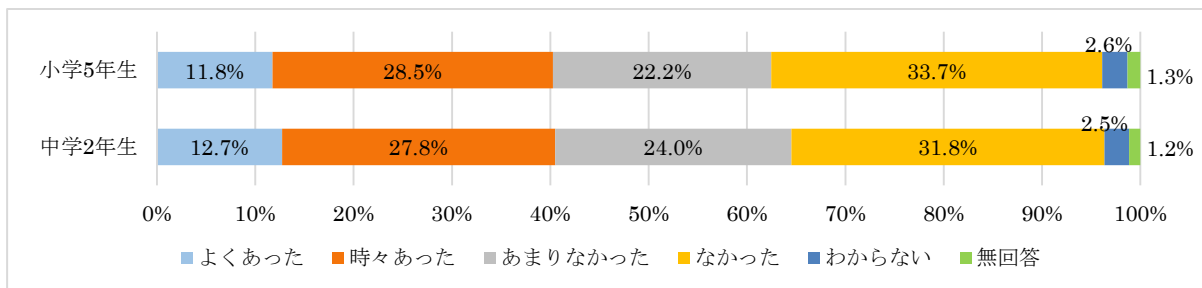
図表 4-4-3 いじめられた経験(中学2年生):生活困難度別(X)



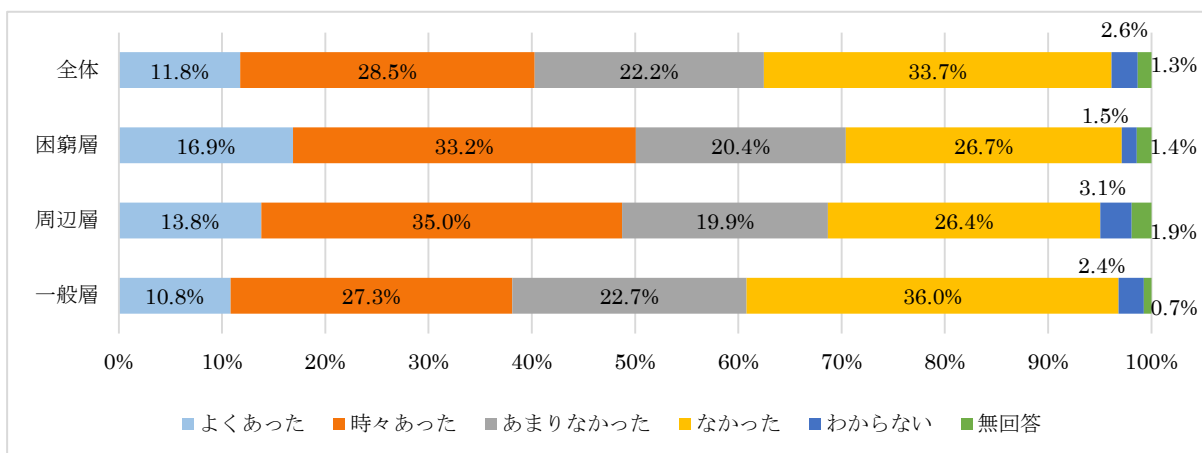
(2) 学校に行きたくないと思った経験（小学5年生、中学2年生）

子供に「学校に行きたくないと思った」ことについて聞いたところ、小学5年生の11.8%が「よくあった」、28.5%が「時々あった」と回答しており、合わせて40.3%が「学校に行きたくないと思った」経験がある。また、中学2年生は、「よくあった」12.7%と「時々あった」27.8%であり、合わせて40.5%が「学校に行きたくないと思った」経験がある。生活困難度別に見ると、小学5年生の困窮層では50.1%の子供が「学校に行きたくないと思った」経験があり、この割合は一般層（38.1%）よりも12ポイント高い。中学2年生においても、同じ傾向が見られる。

図表 4-4-4 学校に行きたくないと思った経験(小学5年生、中学2年生)



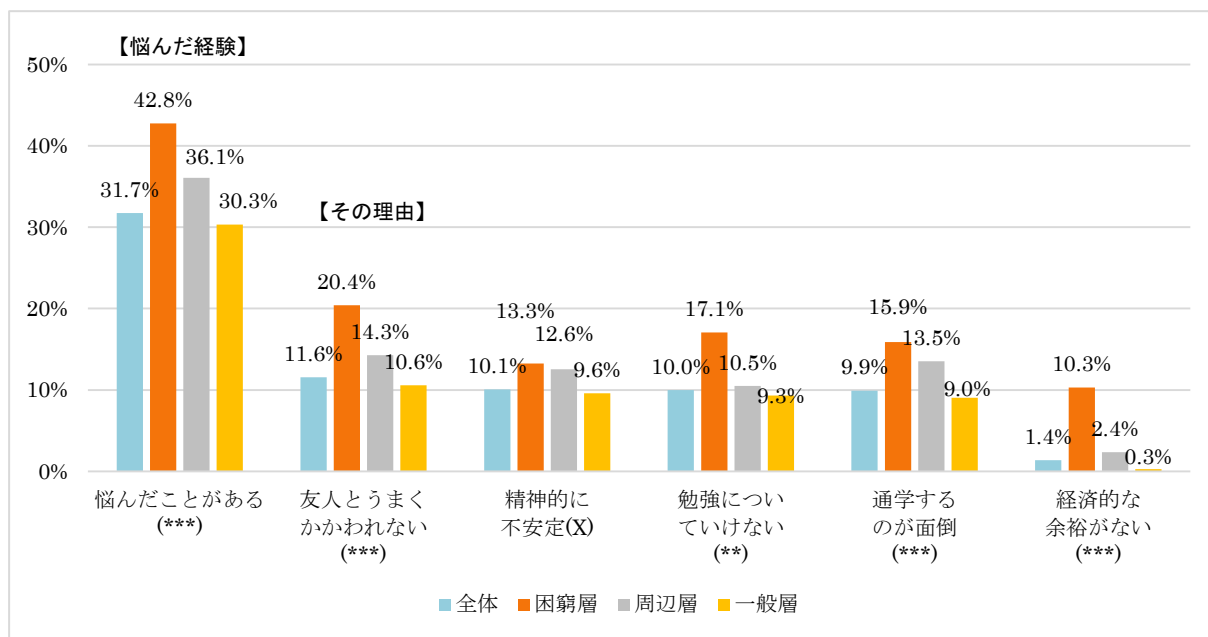
図表 4-4-5 学校に行きたくないと思った経験(小学5年生):生活困難度別(***)



(3) 学校を辞めたくなるほど悩んだ経験（16-17歳）

16-17歳に、「学校を辞めたくなるほど悩んだことがあるか」を聞いた。その結果、16-17歳の31.7%が「ある」と回答している。生活困難度別には、困窮層では42.8%、周辺層では36.1%と、一般層の30.3%より高くなっている。悩みの内容として最も割合が高かった項目は「友人とうまくかかわれない」（11.6%）であり、次が、「精神的に不安定」（10.1%）、「勉強についていけない」（10.0%）であった。困窮層ではすべての項目で一般層よりも高い割合が示されている。最も割合が高い項目は「友人とうまくかかわれない」（20.4%）、次いで「勉強についていけない」（17.1%）となっており、様々な面で悩みを抱えていることがうかがえる。また、「経済的な余裕がない」は困窮層が10.3%であり、周辺層、一般層よりも高い割合であった。

図表 4-4-6 学校を辞めたくなるほど悩んだ経験とその理由(16-17 歳):生活困難度別



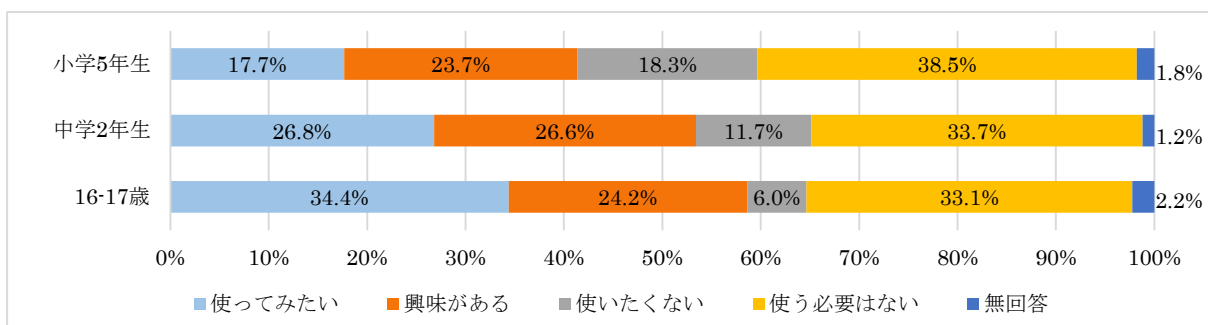
5 居場所支援・相談事業の利用意向

(1) 平日の放課後から夜にかけての居場所

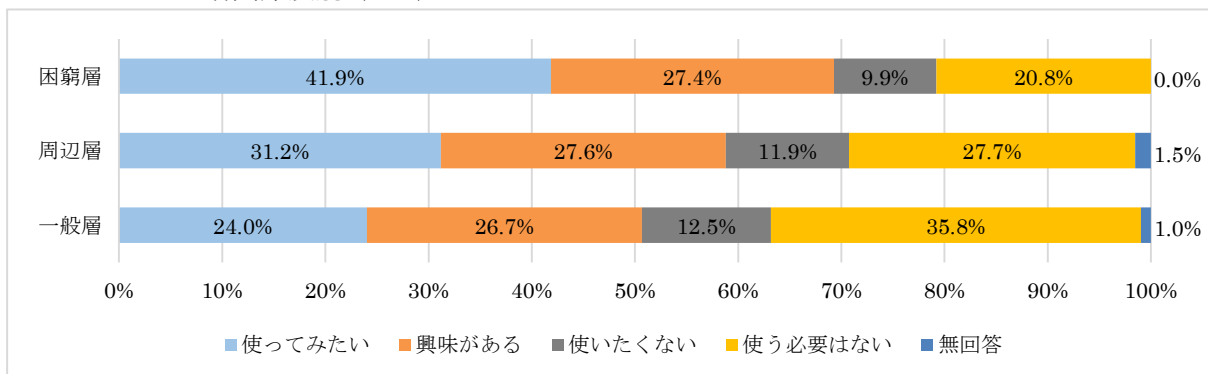
子供に、「(家以外で) 平日の放課後に夜までいることができる場所」について、「使ってみたいと思いますか」と聞いたところ、小学5年生の17.7%、中学2年生の26.8%、16-17歳の34.4%が「使ってみたい」と回答した。「興味がある」を合わせると、小学5年生の41.4%、中学2年生の53.4%、16-17歳の58.6%が「(家以外で) 平日の放課後に夜までいることができる場所」の利用意向がある。

中学2年生と16-17歳では、困窮層ほど高く、中学2年生の困窮層、16-17歳の困窮層、周辺層は約7割近くが関心を持っている。

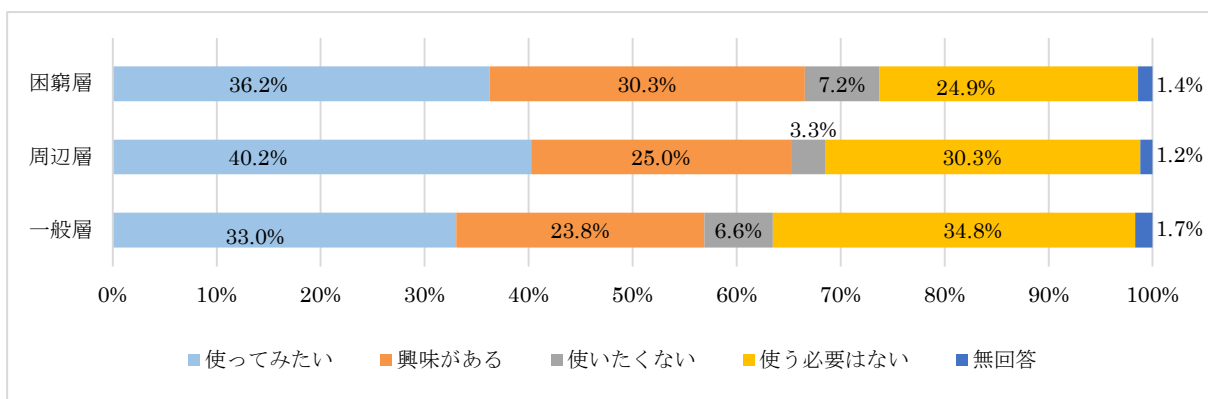
図表 4-5-1 平日の放課後に夜までいることができる場所の利用意向:年齢層別



図表 4-5-2 平日の放課後に夜までいることができる場所の利用意向(中学2年生):生活困難度別 (***)



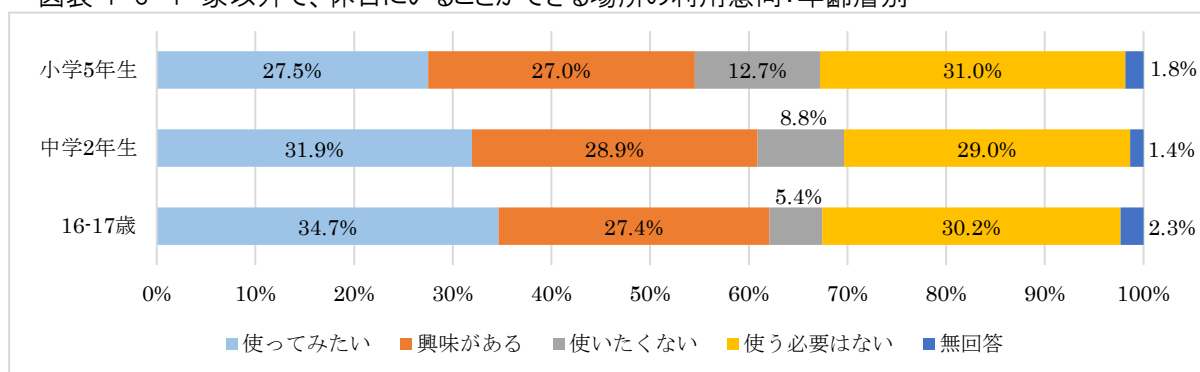
図表 4-5-3 平日の放課後に夜までいることができる場所の利用意向(16-17歳):生活困難度別 (**)



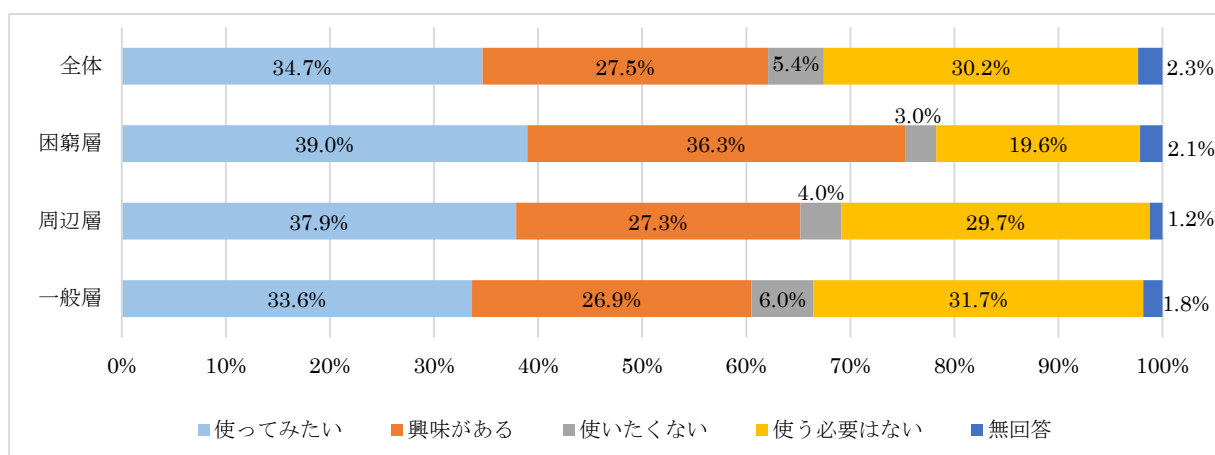
(2) 休日の居場所

子供に「(家以外で) 休日にいることができる場所」について聞いたところ、小学 5 年生の 27.5%、中学 2 年生の 31.9%、16-17 歳の 34.7%が「使ってみたい」と回答している。「興味がある」を合わせると、約 5~6 割の子供が休日の「(家以外で) 休日にいることができる場所」の利用意向がある。生活困難度別には、16-17 歳の困窮層は「使ってみたい」「興味がある」とする割合が一般層に比べて高い。

図表 4-5-4 家以外で、休日にいることができる場所の利用意向：年齢層別



図表 4-5-5 家以外で、休日にいることができる場所の利用意向(16-17 歳)：生活困難度別(**)

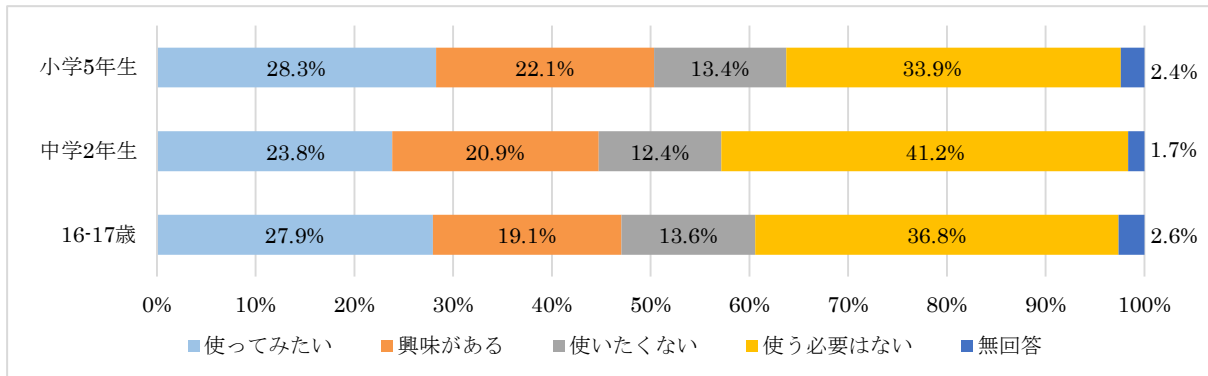


(3) タごはんをみんなで食べることができる場所

子供に「家の人がない時、夕ごはんをみんなで食べることができる場所」(16-17 歳は「(家以外で) 家の人がない時、低額・無料で夕ごはんを他の人と食べることができる場所」)の利用意向について聞いた。「使ってみたい」と答えたのは、小学 5 年生の 28.3%、中学 2 年生の 23.8%、16-17 歳の 27.9%であり、「興味がある」を合わせると、どの年齢層でも約 4~5 割の子供に利用意向がある。

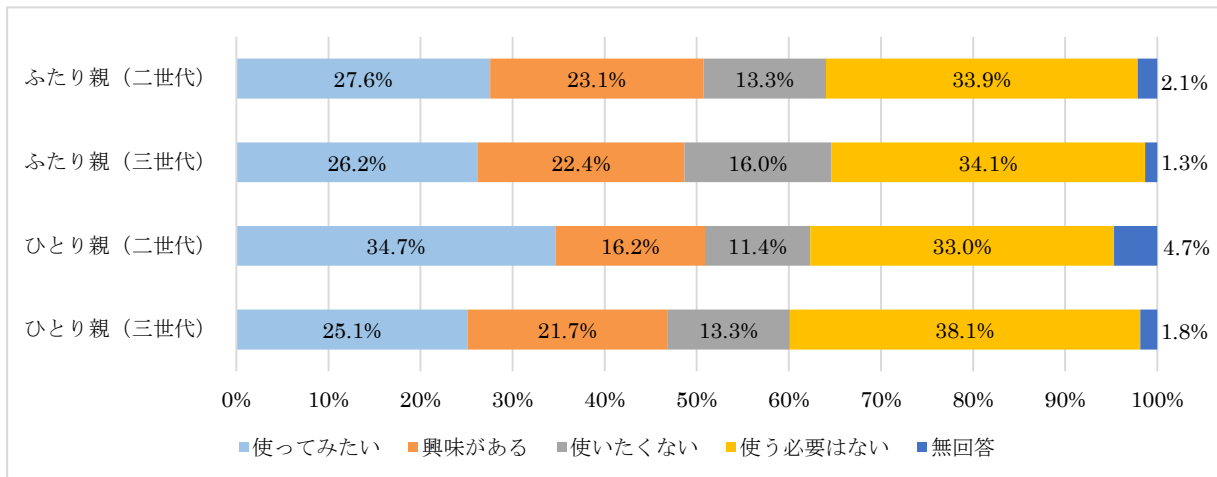
世帯タイプ別、生活困難度別に「使ってみたい」と答えた割合を見ると、小学 5 年生では統計的に有意な差はなかったが、中学 2 年生では困窮層 (32.9%)、16-17 歳では困窮層、周辺層 (35.4%、34.4%) の割合が高かった。

図表 4-5-6 家の人がない時、夕ごはんをみんなで食べることができる場所※の利用意向：年齢層別

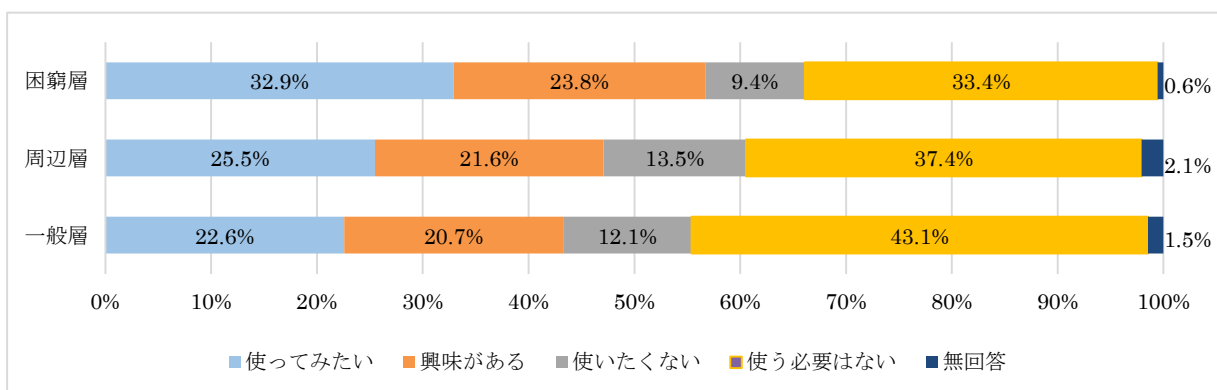


※16-17歳は「家の人がない時、低額・無料で夕ごはんを他の人と食べることができる場所」

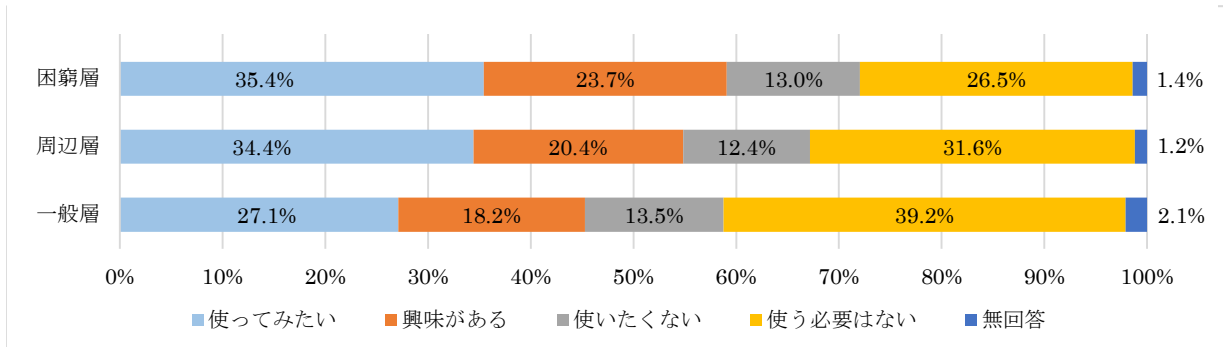
図表 4-5-7 家の人がない時、夕ごはんをみんなで食べることができる場所の利用意向
(小学5年生)：世帯タイプ別(X)



図表 4-5-8 家の人がない時、夕ごはんをみんなで食べることができる場所の利用意向
(中学2年生)：生活困難度別(**)



図表 4-5-9 家の人がない時、低額・無料で夕ごはんを他の人と食べることができる場所の利用意向
(16-17 歳):生活困難度別(***)

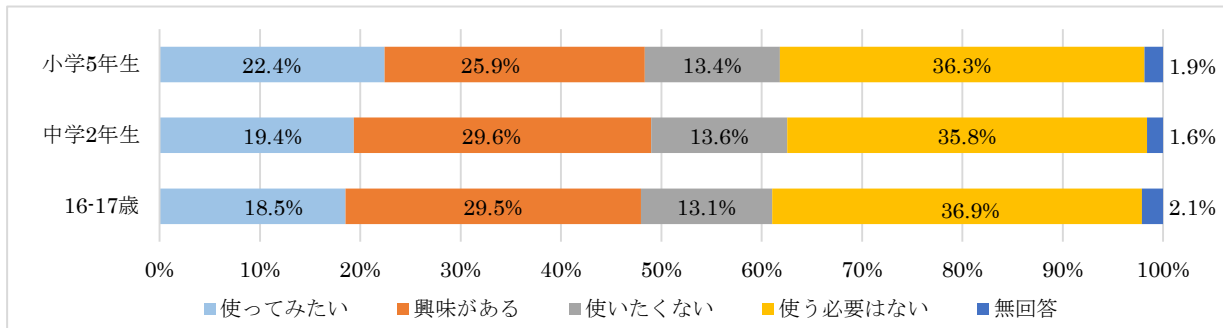


(4) なんでも相談できる場所

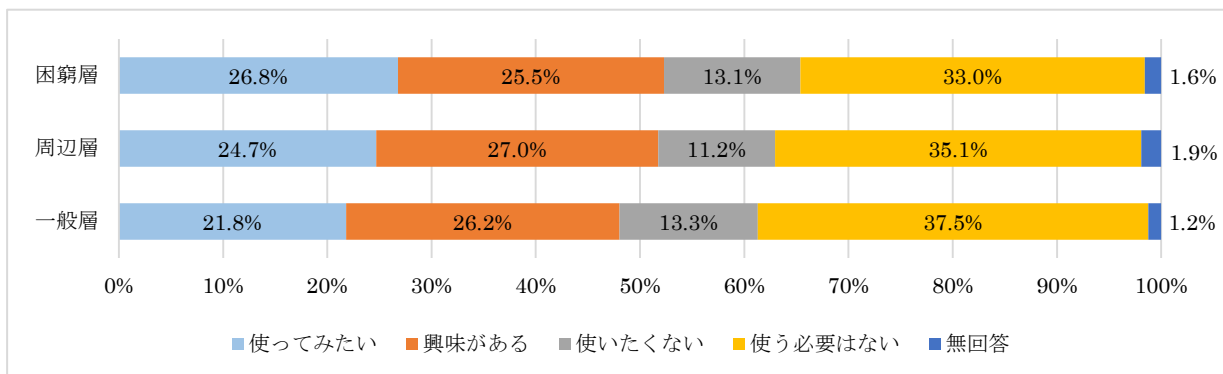
「(学校以外で) 進路や勉強、家族のことなどなんでも相談できる場所」については、小学 5 年生の 22.4%、中学 2 年生の 19.4%、16-17 歳の 18.5%が「使ってみたい」と回答している。「興味がある」を合わせると、どの年齢層も約 5 割の子供に利用意向がある。

「使ってみたい」と回答した割合が他に比べて高かったのは、小学 5 年生では困窮層 (26.8%)、ひとり親 (二世帯) (25.9%)、中学 2 年生では困窮層 (29.2%)、ひとり親 (三世帯) (29.7%) である。小学 5 年生と 16-17 歳では生活困難度別、世帯タイプ別とも統計的有意差はなかった。

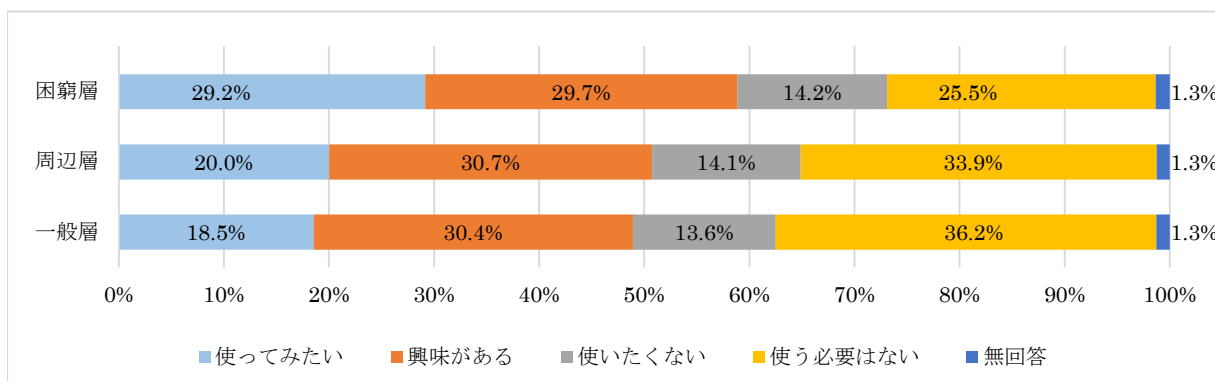
図表 4-5-10 (学校以外で)なんでも相談できる場所の利用意向:年齢層別



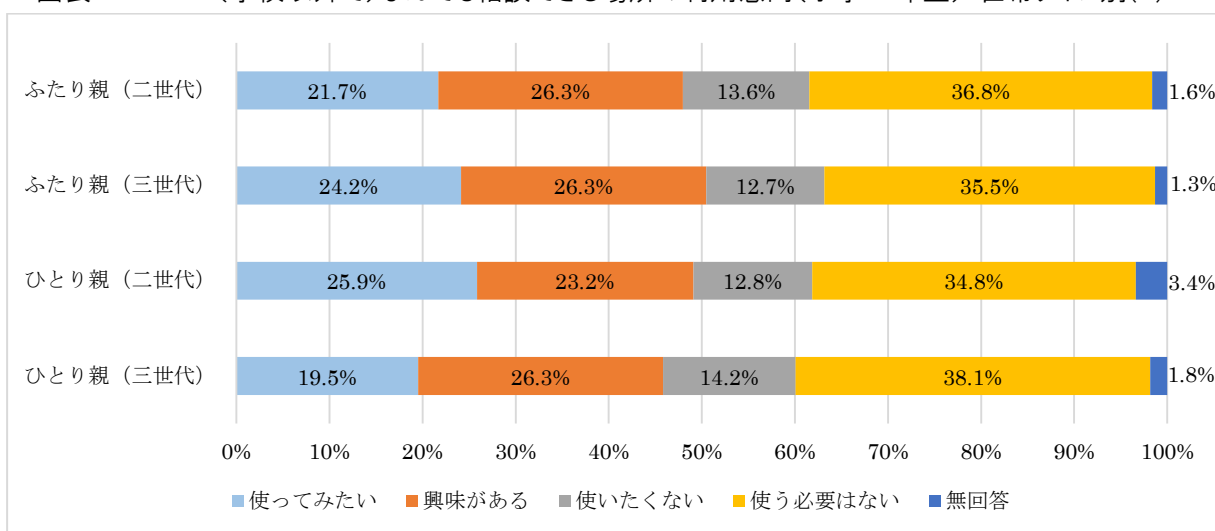
図表 4-5-11 (学校以外で)なんでも相談できる場所の利用意向(小学 5 年生):生活困難度別(X)



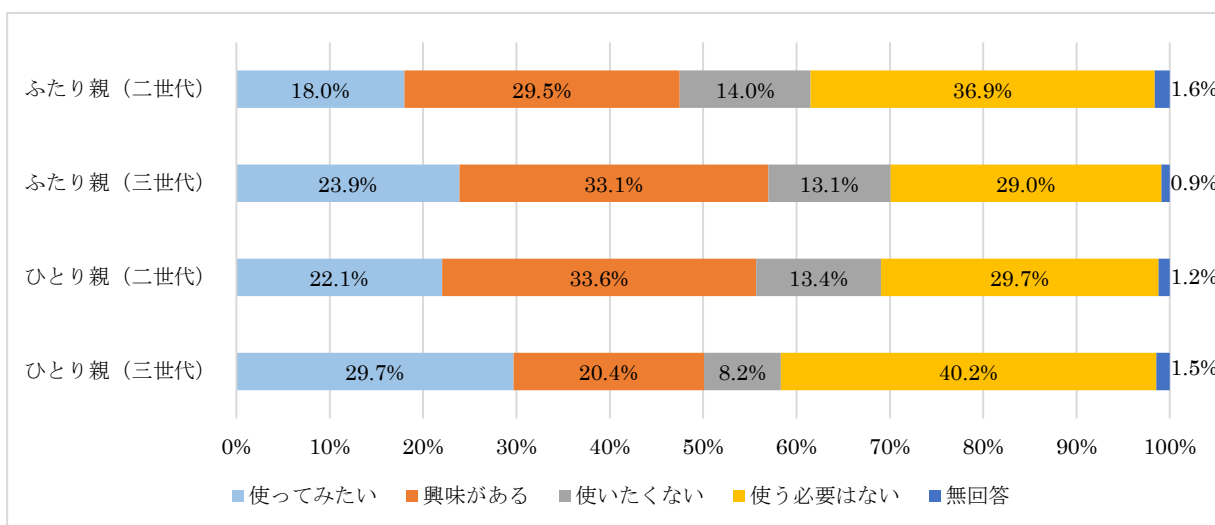
図表 4-5-12 (学校以外で)なんでも相談できる場所の利用意向(中学2年生):生活困難度別(**)



図表 4-5-13 (学校以外で)なんでも相談できる場所の利用意向(小学5年生):世帯タイプ別(X)



図表 4-5-14 (学校以外で)なんでも相談できる場所の利用意向(中学2年生):世帯タイプ別(***)



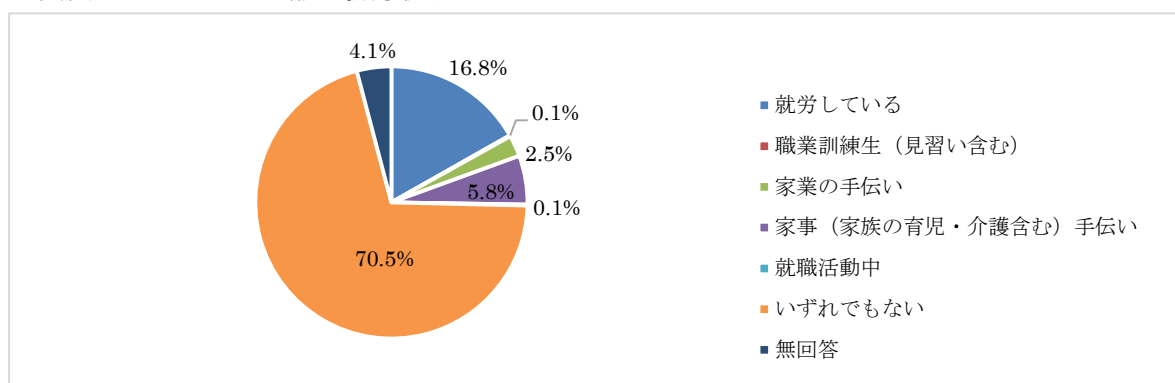
6 16-17 歳の就労状況

(1) 雇用形態と1時間当たりの収入、就業時間

16-17 歳の子供に就労状況を聞いた。16-17 歳のうち収入を伴う仕事をしているのは 16.8% であった。雇用形態は、正規雇用が 2.3% いるが、90.6% が非正規雇用である。1 時間当たりの収入が 1,000 円未満の仕事は 68.4%、1,000 円以上の仕事は 20.9% であるが、世帯タイプ別に見ると、ひとり親（二世帯、三世帯）世帯の 16-17 歳では 1,000 円未満の仕事が 8 割を超える。見方を変えると、ひとり親世帯の 16-17 歳は、1 時間当たりの収入 1,000 円以上の仕事に就く割合が低く、1 割程度にとどまる。1 時間当たりの収入に関しては、生活困難度別には統計的に有意な差は見られなかった。

1 週間当たりの就業時間数は「10~20 時間」が 45.5% と最も高く、次に「5~10 時間」が 24.5% と続き、20 時間未満の割合が 79.9% であるが、週に 20 時間以上就業する者も 12.1% いる。困窮層では、週に 20 時間以上就業する者が 19.3% であった。

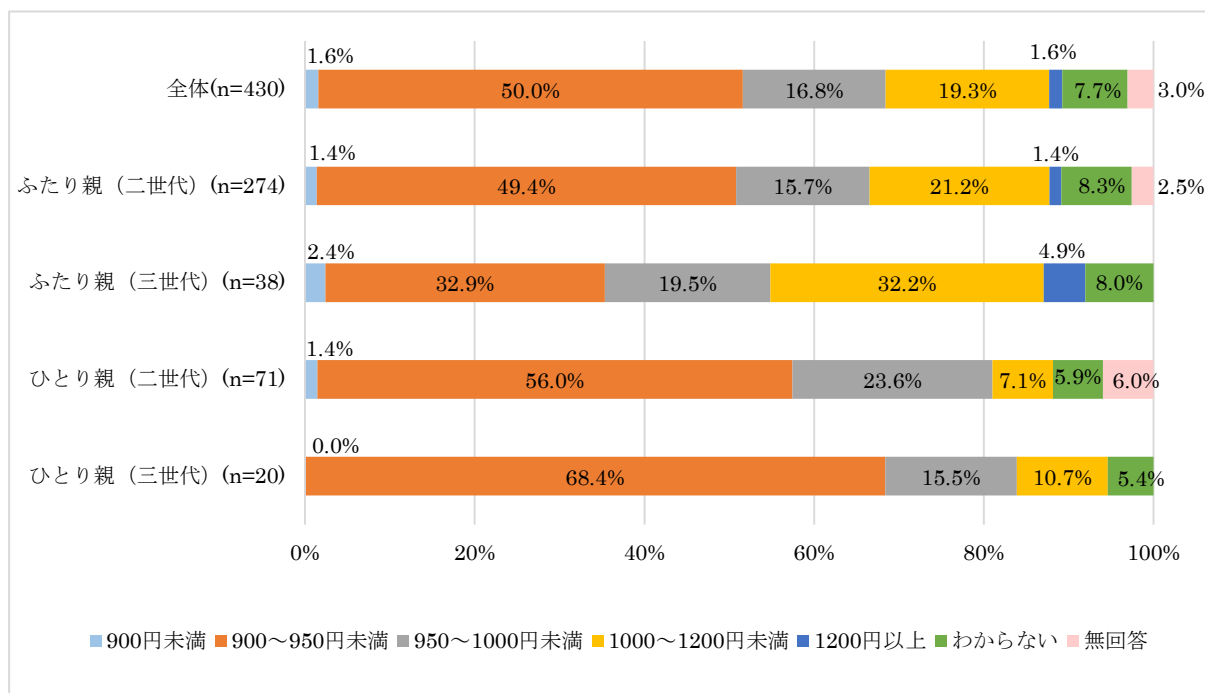
図表 4-6-1 16-17 歳の就労状況



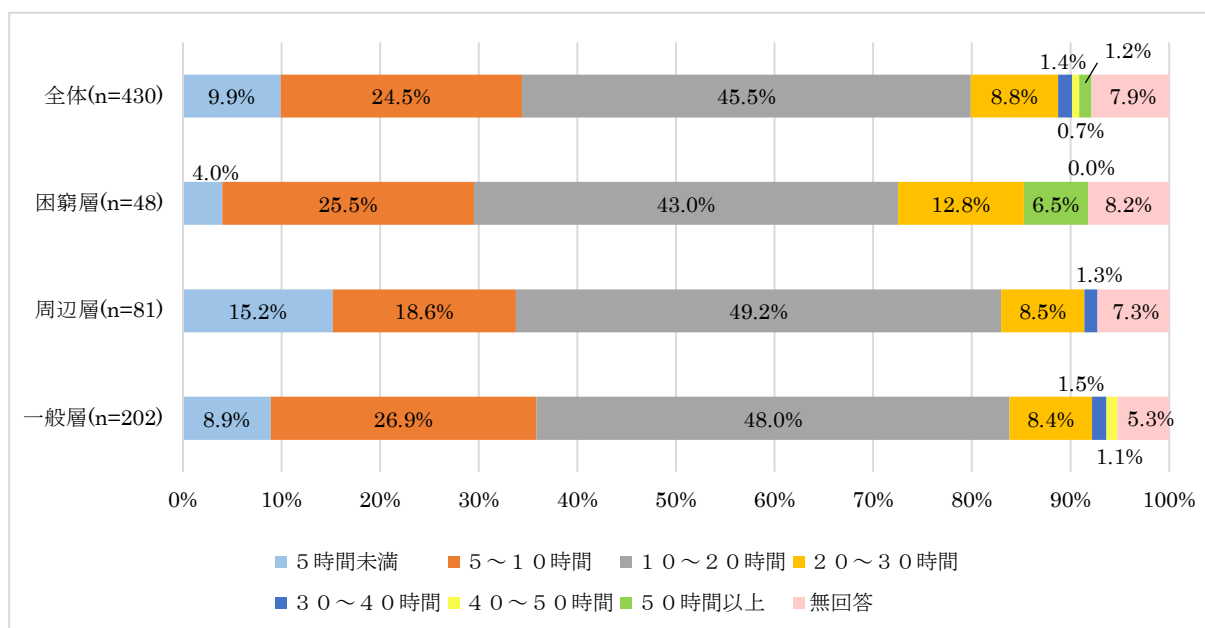
図表 4-6-2 16-17 歳の雇用形態(n=430)

雇用形態	割合
正規雇用	2.3%
非正規雇用（アルバイト）	89.4%
非正規雇用（パートタイム）	0.2%
非正規雇用（派遣）	1.0%
日雇い（日雇派遣含む）	3.6%
自営業	0.2%
自営業の手伝い	0.9%
内職	0.2%
その他	0.7%
無回答	1.5%
合計	100.0%

図表 4-6-3 就労する 16-17 歳の 1 時間当たりの収入:全体、世帯タイプ別(*)



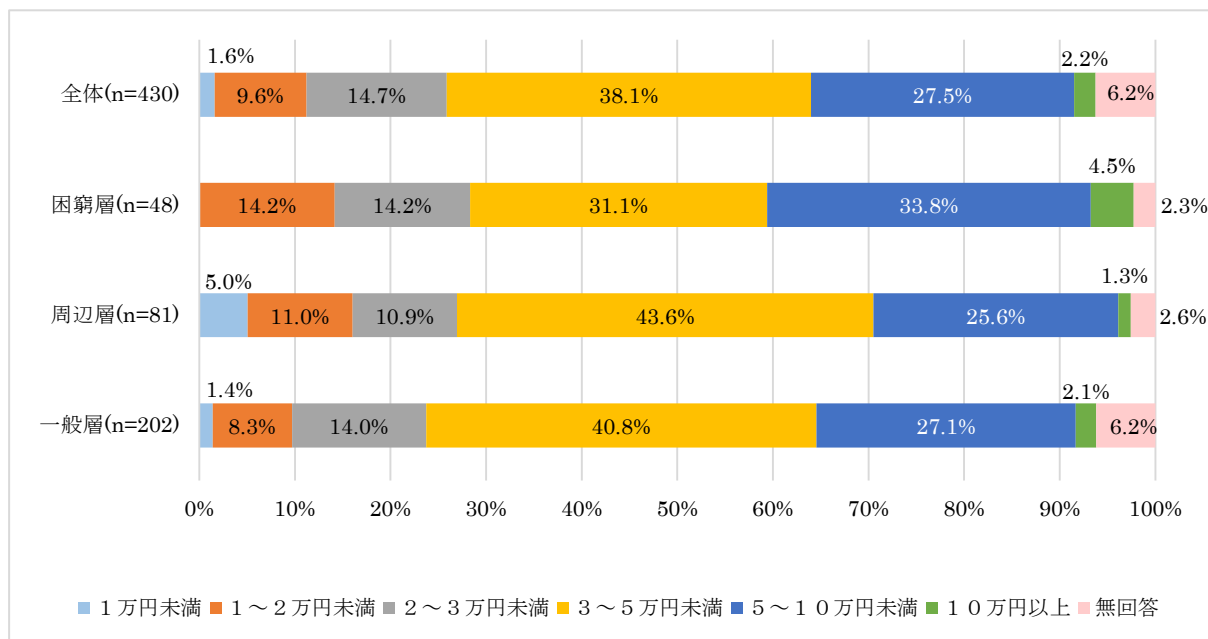
図表 4-6-4 16-17 歳の 1 週間当たりの就業時間数:全体、生活困難度別 (***)



(2) 収入

16-17歳の平均月収は5万円未満が64.0%であり、5万円以上稼ぐ者は29.7%である。生活困難度別に統計的に有意な差は見られないものの、困窮層では約4割が5万円以上の月収を得ている。就労している16-17歳の約1割が家族に生活費を渡している。家族に生活費を渡しているかを生活困難度別に見ると、周辺層では16.5%が家族に生活費を渡しており、一般層の2倍以上の割合である。

図表 4-6-5 平均月収(就労している16-17歳):全体+生活困難度別(X)



図表 4-6-6 家族に生活費を渡している(就労している16-17歳):全体+生活困難度別(**)

